
とりあえず魔術の禁書目録

仁岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とりあえず魔術の禁書目録

【Nコード】

N4212J

【作者名】

仁岡

【あらすじ】

大人気作品『とある魔術の禁書目録』の二次作品です。上条さんを始めとするメインキャラ達が、オリジナルキャラ達の引き起こす事件を解決するために奔走する……そんなお話。

序章 暗闇の中で

冷たい暗闇の中で、彼女は一人膝を抱えていた。

周囲には彼女以外の人間の姿は見えない。誰も何もない場所で、真正正銘の『独り』で、彼女はただそこにポツンと存在していた。

「……………」

ふと、彼女は近くにあった小さな窓に目を向ける。そこに見えるのはこのことと同じ、しかし僅かに光が差し込んでいる黒だけ。もしかしたら夜なのかもしれないが、ここには時間を確認するための時計はない。彼女としても今が夜だろうが朝だろうが、そんな事はどうでもいい。

「……………」

次に彼女は自分の手を見つめる。影に覆われている自身の手はやはり真つ黒にしか見えないが、彼女は本当はそれがどんな手なのか知っている。

とても細く、頼りなく、弱々しい手なのだ。

ぎゅっと、彼女はその細い腕で自分の身体を抱き締める。強く、強く、まるでそれが自分という存在を肯定する唯一の方法だというように抱き締める。それからポツリと、

「……………さむい」

もしここに彼女以外の者がいれば、恐らくまともに聞き取る事もままならないだろうが細い声で彼女は呟いた。

本当に寒い訳ではない。いや、寒いと言えば寒いのだ。ただそれが体であるか心であるかの問題というだけで。

まるで胸にぽっかり穴が開いて、そこから冷風が吹き抜けているような、そんな感覚。それでいて、何か重たいものが胸の内に溜め込まれているような感覚。彼女はそれが何という感情によるものなのか知っている。

孤独、だ。

「……………」

再び彼女は何か呟くが、それはもう彼女自身にすら聞き取る事のできない小さな声だった。

今、自分は何と呟いたのだったか？

だが、彼女はそれを思い出せない。思い出したいとも思わない。

彼女は虫一匹いない『ここ』を一度ゆっくりとした動作で見回してから、瞼をそつと閉じた。

まるで、早くこの悪夢から抜け出そうとするように。

第一章 ちよつとした違和感

学園都市という場所がある。

東京都の西部に存在し、面積は東京の三分の一ほど、二三〇万人の人口の内ほとんどが学生という文字通り学生の街だ。ただし、そこはただ単に色んな学校が寄せ集まってできた都市ではない。

『記録術』とか『暗記術』とか、そんな名前でごまかして『頭の開発』を平然と時間割りに組み込んでいる。

即ち、超能力。

発火能力、電撃使い、その他色々。学生達に特定の時間割りをこなさせる事で科学的に超能力者を作り出す。それが学園都市のもう一つの顔だ。

この学園都市は、一言で言ってしまうば『科学の街』である。実用レベルの風力発電とかお掃除口ホとか、大学の実験品がそのまま街に溢れている事からもそれは分かるだろう。そのため『外』と比べると二〇年ほど文明レベルが進んでいるらしいが。

そんな科学まみれの学園都市ではあるが、世の中には科学では説明しきれないオカルトといったものは確かに存在するのだ。

例えば、ここに上条当麻という一人の少年がいる。

彼という人間を一言で言い表すなら『不幸』だ。

とにかく運がないのだ。この間だつてスーパーに買い物に出かけたら財布を落としてしまい、その財布を探している最中に鳥にフンを落とされ、死に物狂いでようやく見つけたと思ったらばったり出会った腐れ縁のある電撃使いの少女に雷を落とされた。

こんな感じに、一日に必ず不幸な出来事が舞い降りると言っても差し支えない。これを科学的に説明できるモンならしてみやがれ、と上条は思う。そしてできる事ならその対処法も教えてほしい。

「オルア!!! いつまで逃げてんだこのクソガキがあ!!!」

ついでにこの現状を打破する手段も教えてほしい。

罵声を放つのは後ろを走っているだろう六人くらいの不良の誰かさん。熱烈なラブコールを背中から受けながら上条は裏路地をひたすら走り続ける。

「うう、不幸だーっ!!」

もはや口癖になりつつある台詞を叫びながらもスピードは弛めない。というか止まった時点で地獄への招待券を手にしてしまう事になるので止まらない。

まあ、認める。全ては自分の貪欲なまでの睡眠欲が原因だろうというのは認めなくもない。朝明らかに遅刻なフラグが立ってしまう時間帯に起きてしまって、それを意地でも回避してやろうと意気込んで普段あんまり使わない裏路地を通ってしまった自分は確かに浅はかだった。しかしだからってたまたま蹴っ飛ばした空き缶がこわもての方々の顔面にジャストミートって、もはや奇跡の域ではないだろうか？

「いらない！　こんなカナシイ奇跡は俺も誰も望んでいない!!」

「止まれやウラァ!!」

「うつせえ黙れ！　誰が止まるか馬鹿野郎!!」

叫び返した直後に背中からの殺気が膨れ上がったような気がするのは多分気のせいではない。やつちまったー!!　と上条は頭を抱えた。

そのままチラリと横目で自分の右手を見る。

上条にだって一応能力はある。

幻想殺し。

それが異能の力ならば、超能力だろうが魔術だろうが、たとえ神様の奇跡だって触れただけで打ち消す事のできる力。

こんなステキな力も、鉄パイプとか持った暴力上等な不良相手では何の意味も持たない。右手が打ち消せるのは異能の力だけであって、原始的な攻撃の前には無力そのものだ。

そして上条は特別喧嘩が強い訳でもない。そりゃあちよつとは喧嘩慣れしているとは思うが、勝てるのは一対一まで。一対二なら危

ういし、一対三なら迷わず逃げる。その程度の実力しかない。

チラリと背後を見る。

不良の総数は八人ほど。

無理っす。

「あーもう学校への距離は遠のいていく一方だし、朝から何なんでしょうねこの不幸は!？」

上条はそのままの勢いで表通りに飛び出す。

既に結構な時間が経過してしまっているためか、あんまり人の姿は見えなかった。そこら中に立っている風力発電のプロペラが上条を嘲笑うかのようにゆったりと稼動しているのが無性に腹立たしい。と、そこでようやく上条は後ろからの喧騒が止んでいるのに気がついた。

? と恐る恐る失速しながら後ろを見ると、

「あれ?」

いつの間にか上条を追って来ていた不良達の姿は消えていた。諦めた………という訳ではないと思う。ああいう人間は大抵無駄にねちっこい性格をしているので、まだ一キロも走っていない内にダウン、なんてそうそうないと思うのだが……。

「……………何だろう、煙草やアルコールの過剰摂取で予想以上に体がボロボロだったとか?」

うわぁ、と上条は自分の考えに身震いした。なんと恐ろしい。健康第一って本当ですね、とか思っ

「ってしまった!! 学校が!!」

自分の目的を思い出した上条は慌てて学校へと向かう。もちろんダッシュで。

間に合うかなあ、と果てしない不安を抱えつつ、『不幸』な上条当麻は走り続けた。

第一章　ちよつとした違和感　2

「上条ちゃん！！　あなたという人は！　本当に本当に――！」
「いやーすんませんでしたセンサー――！」

結局、上条が学校の授業開始時間に間に合う事はなかった。あの奇跡の缶蹴りさえなければ何とかなったかもしれないと思うと己の不幸っぷりを改めて感じてしまつて凄く嫌だ。

そんな不幸な上条はただいま担任の月詠小萌と説教&謝り合戦の真つ最中。もちろん説教するのが小萌先生で謝るのが上条だ。

本来月詠小萌という女性は、ちよつとした遅刻程度なら笑つて許してくれる寛容な性格の持ち主なのだが、今回に限つてはその寛容さも吹っ飛んでいた。それもこれも、もういいや、どうせ遅刻なら開き直つちまえと破れかぶれで教室に突撃した上条がかました『おはようございまーす』というハタから見れば反省の色皆無の挨拶が問題だった。

後悔しても後の祭りである。とにかくぷりぷりと怒る小萌先生をなだめようと上条はひたすら謝り続ける。

「堂々と遅刻してきてその気さくな挨拶は何なんですかー！？　いくら先生でもこれはお説教の必要性を感じてしまふのですよーっ！」

「いや本当にごめんなさいでしたーっ！！　この上条当麻誠心誠意込めて謝罪する所存であります――！」

本当は少しでも早く小萌先生の怒りを鎮めようとしているだけで、誠意はあんまり込められていないのだが、そんな本音はおくびにも出さずへへっ、と頭を下げて平謝り。その甲斐あってか、小萌先生のぷりぷりモードが鳴りを潜めていく。

「全くもっ……それで、上条ちゃんは今回はどんなカワイコちゃんのために立ち上がったのですかー？」

「立ち上がってねえよ！　っーか先生、いい加減『俺』それ』って方式は捨ててください！　ただでさえみんながそんな事ばかり言

うから在らぬ噂が立つのに！」

しかも実際はキャツキャツウフフなオンナノコとの追いかけてではなく、汗と涙と罵声にまみれた不良達とのデスマーチ。考えるだけで不幸な気分になってくる。

妙にげんなりとした上条をちよつと不機嫌そうな小萌先生がジト目で見て、

「……どの口がそんな事言いやがるのですか上条ちゃん？ まあいいです。今回は許しますけど、次からはもつとちゃんと気をつけてくださいなー？」

おおありがとうございます小萌先生いや小萌様！ とようやくお説教から開放された上条は窓際の後ろの方にある自分の席に着いた。

「……ええなあ。カミヤん、小萌先生の愛を独り占めやなんて」と、隣りに座っていた青髪でピアスな奴がそんな事を言うてくる。

「愛つて……こんな疲れる愛なら喜んでくれてやりたいところなんです。つてか本気で羨ましそうな視線を向けんな鬱陶しい」

「んで、カミヤん今度はどこの美少女のイチヤラブやってたん？」

朝からお盛んやなーパパは許しませんよ！」

「だからしてねえつての！！ どの時もこいつも、俺がやってたのは不良との耐久力レースだつっの！！ つーか何だ、テメエは今の会話の流れ全部スルーしてたんか！ あと貴様のような二次元男の息子に成り下がった覚えはないっ！！」

「不良との耐久力レース……ハッ！ まさかカミヤん、あまりのカミジョー属性の強さに、ついに男にまでフラグが……」

「ストープー！ 有り得ないから！！ いくら不幸な上条さんの人生でもそれは一番あっちゃならない事だから！ て、テメエ神妙な顔して何妄想してやがる今すぐその薄汚い脳内上条さんを消し去りやがれ！」

この野郎に正義の鉄槌を下そうと右拳を振り上げると、

「はいその二人っ！ 今は授業中ですよー。私語は慎むようにしてください。ペナルティで補習しちやいますよー？」

オーケーですねー？ という迫力たつぷり小萌スマイルに上条は振り上げた拳を下ろし、青髪ピアスは無言で頷いた。

ペナルティって何かなあ例のすけすけ見る見るかあるいはコロンプスの卵かなあと戦慄している上条に性懲りもなく青髪ピアスが今度は小声で話しかけてきた。

「（……カミヤんカミヤん）」

「（……んだよ?）」

「（……ボク、不良でもシヨタならいけるで?）」

「（何の話だ馬鹿!! テメエの二次元思考に俺を巻き込むな!）」
思わず叫びそうになるのをぐっと飲み込む。小萌先生は気づいていないようだ。危ない危ない。

このままだと向こうのペースなので上条は話題を変えにかかる。ちなみにそのまま無視していればいいという結論にまで彼の思考は追いつかない。

「（つーかさ、今日やたら学校休んでる奴多くないか? 土御門の奴もいないし）」

上条の言うように、教室には人のいない空席がいくつも存在した。学生寮での隣人である土御門元春の席も同様だ。このクラスの連中は無駄な元気だけが取り柄だと思っていた上条から見れば少々珍しく思える。

「（さあ? 何か知らんケドみんな急な体調不良らしいですよ? 小萌センセーも心配してたで? そしてそんな不安そうな小萌センセーもラブリーでチャーミングでボクのストライクゾーンど真ん中やったでー!!）」

あああははー! と状況報告から小萌先生の称賛に一瞬で切り替えた青髪ピアスに上条は呆れきった冷めたまなざしを送る。

「（ふーん、体調不良ねえ。何だろうな、新種のウイルスでも入ってきたのか?）」

「（だとしたら学園都市が絶滅する事があってもカミヤんだけは生き残るやろうね。よかったなあカミヤん!）」

「（青髪、それは俺が学園都市一番のバカだと言いたいのかね？）
本当にコイツどうしてくれよう、とこのまま沸き上がるムカムカ
を飲み込むか小萌ペナルティ覚悟で拳を叩き込んで黙らせるべきか
真剣に悩み始めた上条だったが、

「（いや待てよ？ たとえ新種のウイルスであつてもそれが感染型
超絶ウルトラ美少女やつたらつまりそれはその娘に全身隅から隅ま
でを冒されていくという事になるねんな。うっはー！！ 考えただ
けで何かムラムラしてきたでーっ！！）」

「頼む黙れ！ お願いだから黙ってください！！ ってか病原菌ま
でいけるってどんだけの大物なんだよお前は！？」

無理だった。耐えられる訳がなかった。こんなのイミワカラ
話をいつまでも聞いていたらこっちの脳がとろけてしまいそうだっ
た。何なんだ感染型超絶ウルトラ美少女って。

つい大声で突っ込んでしまった上条は、そこで気がついた。

「……………」

「……………あ」

小萌先生が何やら授業に集中してくれない上条君にショックを受
けたようにこちらを見ている事を。

信じていた者に裏切られたような、泣き出す寸前の表情を浮かべ
ている事に。

どっ、と上条の背中から嫌な汗が吹き出した。ヤバイ。あれはヤ
バイ。ぶんすか怒ってくれるならまだしも見た目小学生な小萌先生
が泣き出しちゃうのは色々とマズい。

「い、いや違うのよ先生？ 全ての元凶はこの隣りに座る青髪でピ
アスな男にあるのであってわたくし上条当麻はむしろ真面目に授業
を受けようという心構えはできていたのであつてしたがって今の発
言は正当なる理由つまりツツコミから成り立つものなのであつて――

――！！

なんて上条の弁解中にも小萌先生は何も言わない。ただ沈黙を守
り続けている。重たい罪悪感に苛まれ始めた時、クラスメイト達の

敵意ある視線が上条に突き刺さった。擬音としては『プスッ』というよりは『グサッ』って感じに。小萌先生はみんなに愛される理想的な先生なのです。

（うつつ、何だか知らないけど、前にもこんな事があったような気がするのですが――！？）

妙な既視感を覚えながら、上条はクラス中の視線に晒されて続けた。

土御門元春は暗い路地の中を歩いていた。

ビルとビルに挟まれているために、日光が完全には届かず朝だというのに薄暗い世界を形成しているのだ。流れる空気はやや澱んでおり、ゴミや埃、煙草の煙の匂いも混ざっている。もっとも、普段から学校にも通わないおちこぼれ共がたむろっているような場所に清潔感を求める方が酷なのかもしれないが。

そんな中を悠々とした足取りで歩く土御門は、ツンツンに尖らせた短い金髪、薄い青のサングラス、そして首に金の鎖を身に着けているという少々奇抜な格好だった。彼は学園都市、イギリス清教など色々な機関・組織から依頼を受け持つ多角スパイではあるが、格好だけ見れば『ガラの悪いチンピラ』という感じだ。

そんなチンピラもどきの土御門元春は、不意に歩みを止めた。

「……………ようやく見つけたぞ」

いつもの軽い口調ではない、プロとしての声で土御門は言った。彼の目の前には八人ほどの男達が倒れていた。服装や髪型から、ここの常連の連中だろうと土御門は適当に判断する。

彼らは気絶していると言うよりは、眠っていると言った方が正し

いのだろう。

何せ、そこには『それ』がいるのだから。

倒れている男達の中で、ただ一人『それ』だけが悠然と佇んでいる。土御門のサングラスの奥の双眸が自然と細まった。

土御門は淡々と『それ』に語りかける。

「わざわざそっちの方から人目につかないところに来てくれたのはこつちとしてはありがたいが、さて、標的」

土御門は迷いを感じさせない口調で、

「このまま大人しく殺されてくれればそれでよし」。抵抗するなら……」

だが、『それ』は土御門の言葉を最後まで聞かずに走り出した。

「チッ！」

思わず舌打ちして土御門は『それ』を追いかける。

意外にも俊敏な動きで、『それ』はグングン速度を上げていく。だが問題はない。両者の距離はざっと見ても十メートル弱。すぐに捕まえられる距離だ。

と、不意に『それ』は角を曲がった。土御門も同じく角を曲がって、

「……………あーらら」

思わずそんな声が漏れた。

『それ』の姿が消えていた。角を曲がった先は一步道、両者の距離はそれほど離れていなかった。

なのに、見失った。

「空間移動、か。甘く見ていたな。もうそんな段階まで来ていたのか」

ちっ、ともう一度土御門は舌打ちした。

空間移動は自らが触れたものを三次元的空間を無視して特定の地点に転移する事の出来る超能力だ。触れたもの、というのにはもちろん自身の体も含まれる。

一見便利そうに思えるが、この能力は演算処理の負担が大きく、

使用者の精神状態に深く依存している。簡単に言えば、精神が不安定だったりすると能力が発動しなかったり、重大なトラウマを抱えてしまうと長期間能力使用が出来なくなったりする。

そんなデリケートな能力を、『あれ』が使えるとは到底思えないのだが……。

ふう、と土御門は息を吐く。それと同時にプロの顔からいつもの軽い感じの表情に戻った。

「なんつーか」土御門はポツリと、「……………面倒な事になったにや」

第一章 ちよつとした違和感 3

ペナルティ、とは詰まる所大覇星祭の準備に目一杯駆り出される事を指していたらしい。

上条当麻は夕暮れの街をとぼとぼと歩いていた。何やら全身から今疲れてますよ的なオーラをびんびんに発しながら。

大覇星祭というのは学園都市中をあげて行われる大運動会の事だ。運動会と言っても、人口がゆうに百万を超える学園都市全体で行われるのだから、そのスケールたるや半端ではない。ただでさえ競技に参加する生徒は無能力者のような例外を除いて全員が何らかの力に覚醒した超能力者なのだ。何の変哲もない普通の競技で色んな能力がびゅんびゅん飛び交うリアル超能力バトルがご覧いただける。

さらにこの日一週間に限っては、普段は警備が厳しい（らしいのだが、実は結構頻繁に魔術師とかに侵入を許してしまっているあたりそれも怪しいなあと上条は思っている）、少なくとも一般人はどう頑張っても入る事も叶わない学園都市が一般開放される上、テレビカメラでの中継も入るらしい。この時点でその規模の大きさは感じ取れるだろう。

で、そんな大覇星祭に向けて学園都市に住む平凡な高校生、上条当麻も色々と準備をしなければならない訳なのだが、今日は今朝のごたごたによるペナルティで欠席した生徒達の分も働かされるハメになってしまった。ちなみに同罪であるはずの青髪ピアスはちゃっかりトンスラ。忌々しいったらない。

それでも上条なりに頑張ってせっせと準備していると、『上条、貴様何をチンタラしているの？ ぐだくだしてないでさっさと作業するっていうかただでさえ人手が足りないんだからシャキッと仕事しなさい馬鹿！』と何やら運営委員の女子生徒にまくし立てられた上に適当な返事を返したら頭突きを喰らわされた。不幸だ、というより理不尽だ。

そんなこんなでやっとこさ本日のノルマを達成した上条は現在帰宅途中であった。

「……………今日も一日ご苦労様でしたと。あー、こんな感じに自分で自分を慰める事の何と空しい事か」

はぁ、と上条はため息をつきながら空を仰いだ。オレンジ色の空にはアドバルーンがいっぱい浮かんでおり、その下にぶら下がっている最新鋭の超薄型画面に何やら文字がズラーッと並んでいるが読む気にもなれなかった。

しゃーないこのまま夕飯とかの買い出しとシヤレ込むか、と上条が視線を正面に戻すと、

「む？」

視線の先、路上にポツリと立つジュースの自販機の前に一人の少女が立っている。

中学生くらいの女の子だ。肩まである茶色い髪、化粧は必要ない程度に整った顔立ち。身に着けている半袖の白いブラウスにサマーセーター、灰色のプリーツスカートは名門常盤台中学の制服だ。

上条はその少女に見覚えがあった。

御坂美琴。

上条より年下な中学生でありながら、学園都市でも七人しかいない超能力者（レベル5）の第三位、異名は確か『超電磁砲』。そして先程も述べたように学園都市内でも五本の指に入る名門校・常盤台中学のお嬢様……………なのだが、上条としてはどうやったってこの少女がそんな凄い人には見えない。誰だって会う度に電撃をビリビリ放ってくるような危険人物をお姉様とよぶのは気が引ける。

上条としてはできれば絡みたくない、絡むとちよつと面倒な相手ではあるが、このまま素通りして『何無視してんだビリビリい！』とキレられても困る。とりあえず上条は御坂美琴に声をかける事にした。

「よーっす。何だよ、また自販機蹴り飛ばしてんのか？」

女の子にかける言葉としてはいささか問題あるかもだが、彼女の

場合これで問題ない。信じられない事に御坂美琴はジュースを買う際自販機にお金の代わりに蹴りを入れる体育会系お嬢様なのだ。

「……………」

美琴はこちらに視線を向ける。が、特に返事らしい返事はなかった。おや？ と上条は首をひねる。

「どうしたお前？ 何か悪いものでも食ったのか？ おいおい仮にも常盤台のお嬢様が拾い食いとは上条さんは感心しませんよ？」

「……………」

「ありや？ …………… おーい、御坂さん？ 寝てるんですかー？」
冗談を言ってみたが美琴からのリアクションはなし。上条は本格的に首を傾げた。

上条の記憶が正しければ、御坂美琴はこちらが何も言わなくとも勝手に喋ってくれるような元氣少女のはずなのだが。

（あ、もしかして御坂妹の方か？）

ふとその考えに至る。

御坂妹というのは文字通り美琴の妹だ。ただ妹と言ってもその立場は普通の家庭における妹とは大きく異なる。

御坂妹は『とある事情』で美琴のDNAマップと体細胞から生み出されたクローンである。御坂美琴と髪の毛一本レベルで同じ体格を持っているので、普段おでこにつけているごつい暗視ゴーグルのような装備がないと見分けるのはほとんど不可能だろう。

「えっと、お前御坂妹か？」

「……………」

やはりノーリアクション。表情は微塵も動かない。

「…………… あー、」

ちよつと沈黙が辛くなつて、上条の口から意味のない言葉が漏れる。

（美琴…………… では、ないんだよな？ じゃあやっぱり御坂妹？ だーちくしょう、ゴーグルないと見分けがつかねーから困るよなあ……………。つーか何だこの状況、新手の嫌がらせか？）

どうすんべ……と上条が内心頭を抱えた時、

ずいつ、と御坂妹(?)が大きく一步前、上条に向かって歩み寄った。

両者の距離が一気に近くなる。というか、

(うばあっ!? ちよっ、ヤバイヤバいつてこの距離はまずい何がまずいつてこのままだと唇と唇がごっつんこしちやいますよ御坂さん!?)

後退る上条を追撃するようにミサカが接近。吐息がかかる距離まで来た。

唇接触まであと五センチ……三センチ……一センチと来て、

「……………違う」

ポツリと、聞き取れるか取れないか微妙な域の小声で呟いた。

は? と上条が疑問の声をあげる前に、彼女は上条に興味を失ったように踵を返してそのままどこかへ歩き去ってしまった。

「……………えー?」

訳が分からないまま一人ポツリと取り残された上条は、何となく隣りにあった自販機を見つめる。

当然ながら、四角いジューズボックスは何も語ってはくれなかった。

第一章 ちよつとした違和感 4

御坂美琴は夕暮れの街を歩いていた。

てくてくと淀みのない足取りで歩く彼女の手には小さめの紙袋が見える。

美琴が向かっているのは普段彼女が寝食を過ごしている常盤台中学の女子寮ではなく、とある病院だった。病院と言っても、別に彼女自身が怪我をしているとかそういう訳ではない。

（うーん、近場のデパートで適当に選んできたけど、こんなんでいいわよね？ あんまり凝った物渡すとまた余計な事になりそうだし）

美琴はチラリと紙袋に視線をやりながらそんな事を考える。

美琴が今病院へと向かっている理由。それは単にお見舞いのためだった。

ちなみにお見舞いの対象は白井黒子。美琴の後輩して学園都市の治安部隊、『風紀委員』の一員。大能力（レベル4）『空間移動』の能力者でもある少女だ。

彼女が入院したとの報告を受けたのはつい先日のことだった。

学園都市は学生で構成された『風紀委員』の他に、『警備員』という次世代型兵器で武装した教師で構成された部隊が存在する。都市内はこの二系統の部隊によってその治安を守られている、というのが学園都市の学生達の一般常識だ。そしてもしもの場合——戦鬨など——に最前線に出るのは普通は『警備員』の教師達ではあるが、だからといって危険な任務は全て『警備員』任せ、なんて事はない。

特に白井黒子という少女は自身が大能力であるという自信の表れか、そういった危険な仕事を自分から引き受けてくる傾向がある。しかもその場合、心配をかけまいとしているのか、彼女は美琴に詳しい事情を何も話そうとはしない。美琴としては彼女が危険な目に遭う度にもっと自分を頼ればいいのに、ともどかしい思いを抱えて

いる。

ともあれ、彼女は白井が入院したと聞いてすぐさま病院へと向かった。

が、病室へ行くと、予想に反して白井は怪我などはしていなかった。そしてベッドで眠る彼女の前で医師から彼女の容体を聞かされた。

意識不明。

……そう言われてしまうと何だか深刻そうに聞こえてしまうのだが、実際のところは“眠っている”と言った方が正しかった。

呼吸に乱れないし、脳波に異常が見られる訳でもない。本当にただ眠っているといった感じだった。何より病室のベッドの上で眠る彼女の口から『ああん……お姉様……そこは……』とかいうどんな夢を見ているのか一発で分かってしまうような寝言が時折漏れていた。医師としては逆の意味で手の施しようがないらしく、自分の心配を返せやオイ、と美琴は思った。

何でも彼女と同じ『風紀委員』の少女が語るには、何て事のないある任務中に突然白井が倒れてしまったらしく、彼女を慌てて病院に連れてきてもらって現在の状況に至る、という事らしかった。

美琴としてはもう放っておけばいいんじゃない？ という気持ちもあつたのだが、そこは（一応）大切な後輩。こうして見舞いの品も適当に用意してわざわざ病院に向かっている次第だ。我ながら律義だなあ、なんて苦笑していると、

「む？」

前方、路上にポツンと存在する自販機の前で、見覚えのある後ろ姿が見えた。

短めの黒髪をツンツンに尖らせた髪型が特徴の後ろ姿。

間違なくあの馬鹿だ。

何か考える前に、美琴の口は開いていた。

「ちよつとアンタ、何そんなところで愉快に突っ立つてる訳？ 通行の邪魔でしょうが。それともまた自販機にお金飲み込まれた、な

なんて間抜けな目にでも遭った？」

美琴の声にその馬鹿、上条当麻はピクリと肩を震わせ、ゆっくりとこちらを振り向いた。そして美琴の顔を見るなり、何故か安堵したような声音で、

「ああなんだ、ビリビリの方の御坂か」

「オツケーオツケー、その発言の真意を是非とも聞かせてもらおうかしらん？」

バチバチッ！ と美琴の前髪から蒼白いスパークが散った。彼女は学園都市でも七人しかいない超能力者（レベル5）で電撃使いの少女である。

「へ？ あ、いや違う違う！ ただ単にいつも通りの御坂さんのお顔が見れて嬉しいなーって思ったただだって！ いやあ僕らの美琴さんは今日も元気にビリビリだなあ！」

たんとか言うなビリビリ言うなあ！ と美琴の前髪から雷撃の槍（一〇億ボルト、当たるとヤバイ）が上条目掛けて放たれた。

上条はとっさにかざした右手でその一撃を弾き飛ばす。近くを歩いていた数名の学生達がその光景にギョッとしたような顔をしていたが、触らぬ神に祟りなしと判断したのかそそくさとその場から早足で立ち去っていった。

雷撃の槍を打ち消した上条はぶるぶると震えながら、

「……、なんか今日のお前、いつもにも増して短気じゃね？」

「アンタはいつもにも増してムカつくわ」

いつもにも増してと言いつつ、いつも通りと言えばいつも通りのやり取りである。美琴は「はあ」と息を吐いて、

「で、アンタはこんなところで何突っ立ってた訳？」

「いや、何っていうか……あ、そうだ。ちよっとお前に聞きたい事があるんだけど」

「？ 何よ？」

んーと、と上条は頭を掻いて、

「ついさっきここで御坂妹と会ったんだけど——って、何故急に

表情が険しくなりますか御坂さん？」

「な、何でもないわよ。っていうか険しくなんかなくてないわよ」
いきなり他の女の子の話をするな、と美琴は言っただけで、それをして口にするのは何故かものすごくためらわれた。

「？ まあいいや。でさ、しばらく会わない内にいつの間にか御坂妹キャラチェンジされてたみたいなんだけど、お前何か知ってるか？」

「は？ 何よキャラチェンジって？」

んー、と上条は腕を組んで、

「なんつーか、電波系妹キャラから無口不思議系少女キャラにジョブチェンジ、みたいな？」

「人の妹のキャラを勝手に確定すんな」美琴は軽くカチンとしつつ、「まあそりゃあの子達だっていつまでも無関心って訳じゃないし、一人一人に個性が出てきたって不思議じゃないんじゃない？」

美琴は自分と同じ姿をした一万人の妹達（そのほとんどが体の調整という事で学園都市の『外』の機関にいるらしく、実際に都市に残ったのは一〇人もいないが）を思い浮かべた。彼女達は自分の目から見ても言動の全てがほとんど完璧に統一されていて、はつきり言ってしまうとまるで人形のような印象を受けていたが、それでも彼女達は確かに『人間』なのだ。時間が経てばきっとそれぞれがバラバラな個性を得る事だって有り得るだろうと美琴は思っている。
「そっか……そうだな。連中だって、ちゃんと人間として成長してるんだよな」上条はうんうんと頷き、「しっかし無口キャラか。このご時世に需要はあるのかねえ？ ……いや、あの青髪ヤロウなら何でもありだろうけど」

何やらぶつぶつ呟いている上条を美琴はジト目で見て、

「……アンタやっぱり妹キャラとかにグツとくるタイプな訳？」

「いや、そういう意味じゃねーって。つかやっぱりって何だオイ」

「朝起きたらベッドの上にダイブしてきた妹から『おはようお兄ちゃんーん』とか言っただけじゃないか？」

「だから違うつつつてんだろ！！　あとお前の媚び声は気持ち悪いからやめろつて夏の海でも言ったであろうが！」

夏の海？　と首を傾げる美琴に上条は何でもない、とだけ答えた。

「はあ……まあいいや。んじゃ、俺は行くから」

「え？　ちょ、ちよつと待ちなさいよ！」

引き止められた上条は肩越しにこちらを振り向いた。

「何だよ？　俺はこれから夕飯の買い出しに……つて、アレ？　よく考えたら買い物しようにも今お財布の中ほとんどカラじゃん」

つて事は一回寮に戻らなきゃならないのかよー、と上条はぐったりしつつ、

「で、何だよ。何か用があるなら手短にしてくれよ？」

うつ、と美琴は言葉を詰まらせた。

実際、彼女自身どうして上条を引き止めたのかよく分からない。

美琴は内心あわあわしながらそれらしい理由を探して、

「そつ、そうよ！　せつかく会ったんだし、久々に一勝負行こうじゃない！！」

ビシッと美琴は上条に指を突き付けた。その顔はほんのり紅潮していたが、上条は気づいていない様子だった。夕日か何かのせいでそう見えたと思ったのかもしれない。

ただ、『久々』というワードが出た瞬間に少年の片眉がピクリと動いた。

「……………、御坂」

「な、何よ？」

上条はこの上なく真剣な表情で、

「——グッドラック」

瞬間、彼は美琴に背を向けてダッシュし始めた。

わりと全力っぽい速度で。

「つて、え？　ちよつと！　何で毎回毎回アンタの中での私の扱いはこんなにずさんな訳！？　おい！」

美琴の前髪から再び雷撃の槍が発射され、再び少年の右手に打ち

消された。雷撃を受けた少年は『怖ーっ！ 何ですかーっ！？』とちよつと涙目になっていたが、結局そのまま走り去った。

「……………ったく！」

忌々しさに残された美琴は吐き捨てるように言う。せめて一度くらい盛大にぶっ飛んでみるあの馬鹿。

もちろん、一〇億ボルトの電撃なんて喰らえばぶっ飛ぶはぶっ飛ぶでもあの世にぶっ飛ぶ事になるだろう。だがこの点に関しては、美琴はあの少年に対して微妙に嫉れた信頼感を持っていたりする。

「……………」

美琴は、自身の横に突っ立っている自販機に視線を投げる。

もし自販機に意思があるのなら、きっと盛大に震えていたであろう視線を。

「……………こっちの自販機はまだ試した事ないけど」

美琴は四角いジュースボックスの前に立つ。そして、

「上手く誤作動起こしてくれるかしらねっ……………」と！

あの少年への苛立ちも多分に含んだ美琴の蹴りが自販機に叩き込まれる。

ズドン！ という轟音が響いた。

第二章 鏡映し

疲れた。

ただでさえ疲れる大覇星祭の準備を欠員がいるという理由で本来一人がこなせばいいはずの数倍の量を押しつけられた、というだけでも結構な疲労困憊なのに、その上途中で面倒なビリビリ中学生に絡まれたおかげで精神的にも疲れてしまった。

かといってこのままぶっ倒れる訳にもいかない。何故なら自分には寮に戻って夕飯の食材諸々の買い物に行かなければならないという重要任務があるのだから。

詰まるどころ、

「不幸だー」

この一言に尽きた。

ともあれ、気分的にはわりとへろへろな上条当麻はやつとこさ学生寮にたどり着いた。オンボロエレベーターに乗って七階へ向かい、そこを出た後の直線通路を通った先にある我が家へと帰宅した。

ただいまー、と適当に告げてドカドカと部屋の中に入る。

「あ、とうまだ。おかえりー」

部屋にはテレビの前にちょこんと座っている一人の少女と、その横で退屈ですから構ってくださいという感じにゴロゴロと転がっているバカ猫がいた。

少女の名前はインデックス。

白い肌に銀の長髪、さらに緑の瞳。そして着込んでいる服は純白のシルク地に金系の刺繍を織り込んである紅茶カップみたいな壮麗な修道服という外見的日本人らしさ皆無の少女である。

とある世界では『禁書目録』とかいう大層な名前で呼ばれているらしいが、どうも最近上条はこの少女の行く末はNEETではないのかと思えてならない。

「とうま。何か失礼な事考えてない？」

疑わしげな目を向けてくる彼女にそんな事はない、と上条は首を振って答える。

そのままふとインデックスの前のテレビ画面に視線を向ける。そこには何やら夏休みにも見た覚えのある映像がいつぱいに広がっていた。

「って、お前はまたそのアニメかよ」

「違うよとうま。これは超起動少女カナミンセカンドシーズンの再々再放送なんだよ」

「ただけ再放送してんだよ、と上条は呆れながら肩を落とした。ちなみに画面には白を基調としたひらひらした服を着た魔法少女と、ハゲ・デブ・中年という三重苦を背負った敵役らしいオッサン（何故か装備はブリーフっぽい白い海パン一枚）がどんぱちバトルを繰り広げていた。本当にどうでもいいのだが、オッサンが攻撃する度に少女のひらひらした服がビリビリに破れてそろそろ本格的にヤバくなってきたのはどうなんだろうか。」

「……いや、これ本当に子供向けアニメなのか？ この前はデロデロとした触手じみたものに襲われたとか言ってたっけ？」

昨今のオタク文化に凄まじい違和感と危機感を抱く上条に、インデックスはちつつちと指を振った。

「分かってないなあとうまは。この絶体絶命のピンチから、カナミンの大逆転劇が始まるんだよ！」

いや確かに危機は危機だけど、これって命云々よかむしる貞操の危機なんじゃ？ なんてツツコミを入れたりはしない。自分は少女のお星様みたいに輝く瞳を踏みにじってまで現実を見せてやるような残酷な人間に育った覚えはない。なのでできるだけ温かい目を持つて見守る事にする。上条当麻の半分は優しさでできているのだ。

その後はインデックスが何やらカナミンについて熱弁を振るってくれたが、二割も理解できなかった（そもそも彼女はこのアニメを自分なりの解釈で見ている節があるので、余計な専門用語も混じってますます訳が分からないのだ）。インデックス先生のありがたい

授業を右から左へと受け流した上条はとりあえず学生鞆を部屋に置いてから財布にお金を詰め込んで玄関へと向かう。

「インデックス、今からちよつと買い出しに行ってくるからもっかい留守番よろしくな」

「うん、分かった」

意外にもすんなりと答えたインデックスは再びテレビ画面へと頭を向けた。どうやら今の彼女は食事よりもアニメにご執心らしかった。とはいえ、油断はできない。空腹になった彼女の噛み付きは何より恐ろしい最終兵器なのだから。

さつさと帰ってこよう、と玄関を出ようとした上条だったが、不意にポケットの中の携帯の着信音が鳴った。

「？」

見れば、表示されている番号は見知ったものであった。上条はとりあえず電話に出る。

『にやー！ カミやーん、元気にしとるかにやー？』

電話越しに耳に飛び込んできたのはそんな奇妙な猫ボイスだった。惜しむらくは、それが女ではなく男の声だった事だろうか。いや、別に上条にそういった好みがある訳ではないが。

「いきなりなんだよ土御門—— っていうかそうだ！ お前このクソ忙しい時期に何堂々と学校サボってくれてんだよ！ お陰様で俺はボロボロのヘロヘロになるまでコキ使われるハメになったんだぞ！ とりあえず謝れ！ そして今度の準備の際は上条さんの分まで精一杯働きますとここで誓え——！」

『にやー、ごめんちゃーい んでカミやん、こっちの用件なんだけど』

「……俺の怒りは華麗にスルーかよ」上条はやや脱力して、「で、何だよ用件って。念のため言っておくとこの前借りたゲームはまだ返せないぞ未プレイだから」

『違う違う、ゲームはどうだっていいんだぜい。いや良くはないけど。さつさとプレイして返せと言いたいけど今はともかくその話じ

「やねー」

そこで土御門の声がちょっとだけ真剣味を帯びたものになる。

『ちよつくらカミヤんに手伝って欲しい事があるんですたい。と、インデックスはどうしてる？』

「あん？ 部屋の中でテレビにかじりついてるけど。それがどうかしたか？」

『そうか、そりゃあ何よりだ。この局面で禁書目録に出てこられるとまたまた面倒な事になるだろうからにやー』

面倒な事？ と上条は訝しんで、

「なんだよ、また学園都市に魔術師が侵入したとかそんな展開か？ 上条としてはちよつとしたジョークのつもりだったのだが、

『おお、カミヤン、いつの間に未来予知なんてできるようになったのかにやー？』

.....。

「えと、土御門？ ごめん何て？」

『あん？ 何って、カミヤンが自分で言ったんじゃない？ 土御門は不思議そうに言って、『ま、その予想はせいぜい五〇点ってところか正確には侵入というより“出現”だし、“そいつ”は別に魔術師でもない』

「ちよ、ストップ土御門」

『しかし魔術師でなくとも、“そいつ”が放っておく事のできない存在である事は間違いない。つー訳でカミヤン、悪いんだけど手伝ってくれないかにやー？』

「ストップストップストップ！ どういう訳！？ っていうか話が飛び過ぎだ馬鹿！ 人にヘルプを求めるならちゃんと一から説明しろっての！」

ああ悪い悪い、と土御門は適当に答え、

『そうだな、どこから話すか.....』

やや間を置いてから、土御門はおかしそうに笑った。

『——カミヤン、鏡映し（ドッペルゲンガー）って信じるか？』

第二章 鏡映し 2

ドッペルゲンガー。

「……………つーと、あれか？ 自分と同じ姿をしていて出会ったら死んじゃうってやつ」

『概ねそれで合ってるぜい。一説では『生きている人間の霊的な生き写し』を意味し、出会ったら死ぬというよりその者の死期が迫っている事を示すための存在とも言われているが、まあ細かいトコロはどうでもいいにやー』土御門は世間話でもするような軽い口調で、『重要なのは、その『鏡映し（ドッペルゲンガー）』が今、この学園都市に出現しているって事だ』

は？ と上条は土御門の言葉を頭の中で反芻する。

ドッペルゲンガーなんて、いかにもオカルト臭が漂うモノが、学園都市にいる？

「……………おいおい、魔術師が学園都市にホイホイ侵入して来るのには何となく慣れたけど、今度は何、ドッペルゲンガーだあ？」

『おや、その声は信じてねーにやー？』

だってなあ……………と上条はボリボリと頭を掻く。

自分の記憶が正しければ、ドッペルゲンガーというものはあくまでも『現象』の一つである。しかも限り無くうさん臭さ漂う『現象』だ。そんなもんがこの科学バンザイの学園都市に現れたなんて言われてもホイホイ納得はできない。

「そもそも、同じ姿ってなら肉体変化の能力者がいるじゃねーか」
『肉体変化とはちょっと違うぜい。ありやあくまで自分の身体を作り変えるモンだし、それでも遺伝子レベルでの変化は不可能らしいしにやー。まあ今から説明すつからとりあえず聞けカミヤん』

そう言われて上条は土御門の言葉を待つ。

部屋からはアニメのキャラにエールを贈るインデックスの叫び声にも似た声が聞こえてきた。電話越しの会話をするにはややボリュ

ームが高めだったので、上条は玄関を出て通路の金属の手すりに寄りかかる。そしてタイミングを見計らったように土御門の声。

『まずこの場合のドッペルゲンガーってのは『現象』じゃなくて、『能力』の一つな。発現者はある一人の少女。能力自体は肉体変化と似てはいるが、決定的に違うところがいくつかあるんだぜい』

「違うところ？」

ああ、と土御門。

『まず変化するのは自分ではなく、能力によって作り出された『もう一人の自分』って点だにやー。自分の思い通りに動き視覚などを共有した、精巧に作られた操り人形みたいなモンか』

上条の頭を、以前学園都市に侵入した、ゴーレム使いのシェリーの姿がよぎった。

『ま、これはこれですごいかもだが、重要なのはこつからだ。肉体変化が“姿を真似るだけ”の能力なのに対して、『鏡映し』は“本人そのものになる”って能力なんだよ』

上条は一瞬土御門の言葉を理解できなかった。

数秒の間を置いて、ようやく口が開く。

「待て、土御門。それってどういう……？」

『どうもこうも、言葉通りの意味だぜい』土御門はあっさりと言い放つ。『姿だけでなく、遺伝子情報、思考力、果ては“本人の記憶から能力まで、全てを鏡に映すかのように完璧にコピーしちまう能力だ”』

その言葉の意味に上条はギョツとした。特に、最後の言葉に。

「おい、何だよそれ。それって要は多重能力者って事じゃねーか！」
多重能力者。

文字通り、複数の能力を持ち合わせた能力者を指すが、それは実現不可能であると前に小萌先生から聞かされた記憶がある。確か、複数能力を持つには脳への負担が大きすぎるとか言っていたような気がする。

そもそも、土御門の言うように肉体変化はあくまで姿を真似ると

いう一つの能力である。高度な変装術と解釈すれば分かりやすいか。当然ながら、いくら姿を真似たところでその人物と同じ能力が得られる訳ではなく、どこまで行っても『肉体変化』という能力の域は出ない。

しかし彼の言葉が真実ならば、例えば発火能力を持つ人間の姿を真似ればそいつは『鏡映し』と『発火能力』の二つの能力を得る事になるではないか。

混乱する上条の反応を笑うように土御門が言う。

『まあぶっちゃけちまえばカミヤんの言う通りなんだろうが、そこがまた面倒な話なんですたい。いいかいカミヤん、そんなとんでもない能力、そうやすやすと発動できると思うか？』

「……………、つーと？」

上条が首をひねる。

『姿を真似るだけなら簡単だろうが、記憶や思考まではそうはいかないだろう？ 他人の姿をいくら見たところでそいつの頭の中まで見える訳じゃない。なら、その思考はどうやってコピーすればいいと思う？』

上条の中で嫌な予感が渦巻いた。

『——簡単な話だ。分からないなら、“取り込んでしまえばいい”。食べ物の味が分からないから食べてみるのと同じでな』

その予感を肯定するような、土御門の言葉。

『具体的な方法は知らんが、人間の精神……人格とも言える部分を無理矢理はぎ取って、そいつは食らうんだよ。そうする事で初めて鏡は対象を『完全に』映し取る事ができる。ちなみに、中身を抜かれた人間は意識を失ったままオネンネだ。公にはされていないが、すでに結構な数が鏡映しにやられてるぜい。ウチの学校にも何人が犠牲者がいるみてーだにやー』

上条は驚くと同時に、何となく納得もした。今朝から感じていた妙な違和感。元気だけが取り柄なクラスメイト達が多数欠席していたのは、そんな理由があったからなのか、と。

しかし、今の説明だけでは分からない事がある。

「待てよ土御門、犠牲者つてのはどういう事だ？ ドッペルゲンガーってのは人を襲ってんのか？」

「にゃー。そこもまた面倒なトコなんだが……その鏡映しの能力者の少女だが、能力が暴走してんだよ」

何？ と上条は眉をひそめる。

「たまにいるだろ？ 自分の能力を上手く制御できないヤツ。この少女もそうだ」土御門は淡々と、「自分で生み出したもう一人の自分を制御できず、今じゃドッペルゲンガーが勝手に動いているような状態だ。しかも意識が混線しているせいか能力を使う側であるはずの本人が能力に乗っ取られている有様で、まともな思考もできないらしい」

「能力の暴走、か……」

無能力者の上条には実感が湧かないが、それが非常に危険な事であるというのは分かる。機械であれ人であれ、『暴走』なんてものはろくな結果を招かない。

「ま、主人の手元を離れたドッペルゲンガーが何を目的として学園都市の人間を襲っているのかまでは分かん訳だがにゃー」

土御門は言う。

「けど分かるだろうカミヤん。現状だけでも結構な大事なのに、もし仮に鏡映しが科学サイドではなく魔術サイド……例えば、禁書目録の知識を手に入れたりしたら……。それこそ、世界は大変な事になっちまうぜい」

確かに、と上条は思わず頷いた。

インデックスには完全記憶能力という、一度見たものは二度と忘れないという特殊な能力が備わっており、彼女はそれをを用いて一〇万三〇〇〇冊という膨大な量の魔道書を頭の中に収めている。当然ながら、その知識を求めて彼女を狙う魔術師は大勢いる。

では、それが二人に——しかも、そのどちらの所在も魔術師とは正反対の学園都市にあったのだとしたら？

考えたくもない話だ。

「それで、俺に手伝ってほしいって訳か」

『そ。カミやんの右手ならドッペルゲンガーに触れるだけでこの事件は解決できる。なんせ相手は異能の力の塊みたいなモンだからやー』

上条はため息をついた。

「分かったよ、協力する。んで？ そのドッペルゲンガーは今どこにいますとか調べはついてんのか？」

『いやあ、それが全然』

「つておい！」

さっそく出鼻を挫かれた上条は電話越しに突っ込んだ。対して土御門は極めて軽いノリで、

『いやいや、正確には『分かった』つていう過去形だにやー。ただ一回見つけてから結構な時間が経つちまつてるし、今どこでどんな姿してるのかまるで見当がつかねーつてのが現状ですたい』

「何だよそれ。場所も姿も分からない相手を探し出せとか不可能だろ！ しかもこの学園都市って馬鹿広い範囲で！」

しかも土御門の話を聞く限りなんか人手不足っぽいし、多分何時間何世紀都市中を走り回ったって見つかりっこないだろうと上条は思う。

『そつだにやー……おおそうだ。カミやんが道行く人に片っ端から右手で触れてみるとか』

「ちよつ、ふざけんな！ そんな見境のない痴漢紛いな事したら迷わず通報されるわー！」

『まあ冗談は置いといて』

「冗談なのかよ、と上条はげんなりする。何か無駄に体力と気力を消耗させられた気分。

『これまでに得た情報から、ドッペルゲンガーを見分ける方法はある』

「方法？」

『ああ。相手の行動パターンにはある一定のルールがあるんだよ』

土御門は一呼吸置いて、『まず、ドッペルゲンガーが誰かの姿を取ったとする。すると必ず奴は姿を取った本人の近く、或いは本人に縁のある場所に現れる。次に、ドッペルゲンガーは周囲の人間と会話をしない。話しかけられてもおおよそ会話と呼べる範囲のやり取りはしない。——これが能力による何らかの制限なのか意図的にやってんのかは知らんが、特徴としてはこんなトコだな。とりあえず、

『無口な変なヤツ』がいたらそいつが怪しいぜい』

「……そりゃ、無口な変なヤツは怪しいだろうけど……」

それは別にドッペルゲンガーに限った事じゃないんじゃないか？ とか上条は思ったが、口に出したら負けなのだろうか。いや勝ち負けの問題じゃないのだろうか。

上条はオレンジな空を眺めながら、

「つーかさ土御門、たったそれだけの情報で相手を見つけるのなんてやっぱり無理なんじゃ——」

と、そこで上条の口が止まった。

『？ どうしたカミヤん』

土御門が怪訝そうに尋ねてくるが、その声すらどこか遠くに聞こえるくらい、彼は夢中で思索していた。

（——なんだっけ？）

何かが上条の中で引っかかっている。とても小さいようで、しかし無視してはいけない事のような、そんな奇妙な引っかかり。自分が何か大切な事を見落としているような、途方もない不安。違和感。（なんだ……？）

今土御門に言われた事。

ドッペルゲンガー。

他人の姿をとる。

知っているはずなのに、何かが違う違和感。鏡映し。

——御坂？

「あ」

上条の頭に、電流が流れたような衝撃がきた。
あの時。

自販機の前に立っていたあの少女。最初は御坂美琴だと思っていて、すぐに美琴本人が来た事でそれは間違いだと分かって、じゃああれは御坂妹なのかと上条は納得していた、あの少女。
もし仮に、あれが御坂妹ではなく。

御坂美琴の姿をとった、鏡映しなのだとしたら？

そして、もし鏡映しだとして、それがあそこに——美琴の近くにいた理由は？

「くそ……ッ」

可能性は低い。

上条の単なる思い過ごしで、あれは本当にイメチェンした御坂妹だったのかもしれない。

だが、逆に言えば、可能性は決してゼロではない。
土御門が言うには、ドッペルゲンガーは周囲の人間と会話をしないらしい。

思えば上条は、あの御坂のような少女と会話をしていない……と思う。あれはどちらかと言えば自分が一方的に話しかけていた状態だった。

条件は、揃っている。

「……悪い土御門、一旦電話切るな。何かありやまたかけ直す」
『は？ おい、カミヤ——』

何か言いかけた土御門を無視して上条は通話を切った。

「くっそ……！ 簡単にやられたりしねえだろうな、あの超能力者！」

吐き捨てるように呟き、上条は駆け出した。

第二章 鏡映し 3

そろそろ辺りも暗くなってくる頃、御坂美琴はコンビニでマンガ雑誌を立ち読みしていた。

後輩・白井黒子のお見舞いに行った彼女だったが、肝心の白井は依然として眠ったままだった。なのでお見舞いの品を置いて病院を出た美琴だったが、しばらくしてから今日は彼女の毎週のお楽しみである週刊マンガ雑誌の発売日である事を思い出し、こうしてコンビニに立ち寄った次第だ。

（だぁあーッ！ ここ！？ ここで次週！？ 何なのよこれでもう三周目よ一体どれだけ延ばせば気が済むのよこの作者ー！！）

理不尽な現実には美琴の雑誌を持つ手がぶるぶると震える。散々気になっていた続きがようやく読めたかと思えばこの仕打ちだ。きつと自分以外の読者の皆様も怒り心頭だろうと美琴は一人勝手に確信する。

彼女は肩を落としてマンガ雑誌を棚に戻しながら、

（つていうか、よくまあここまで話を引っ張れるわよね。……いや、待てよ？ これはもしかしてネタ切れに陥っている？ だから敢えて読者の反感覚悟で結末を先延ばしに？ ちょっとちよつと、頼むわよー顔も知らぬ作者様。まだ先は長いしいざ大ボスとの対決になってネタ切れなんてオチは勘弁よー？）

散々ごねつつもガツッリハマっている常盤台中学のお嬢様であった。ちなみにさっきから店員さんが迷惑そうな視線を送ってきているのだが美琴は全く気がついていない。

（さつてと、寮の門限まではもう少し時間があるし、何か他にめばしい物は……？）

そんな事を考えながら雑誌のコーナーに視線を泳がせる美琴だったが、ふとその動きがある一点に止まる。

その視線の先には小さなサイズの雑誌。

そこにはデカデカと『ぶきつちよなアナタへ！ 気になるあの人と仲良くなれる一〇〇の方法』というタイトルが。

「……………」

美琴は数秒硬直した後、

（ああもつ、馬鹿じゃないの！？ 私はただぞんざいに扱われるのが気に食わないだけで、別にあの馬鹿と仲良くしたい訳じゃないっての！）

美琴はブンブン！ と勢い良く首を横に振る。そして顔の紅潮が収まってきた頃、ようやく美琴は店員さんが自分に送ってきている視線に気がついた。しかも『迷惑そう』から『不審そう』にレベルアップしてる。ただでさえ買物をしていかない客は疎まれる存在である上にそれが挙動不審な態度を取っていれば当然の対応である。

美琴は店員さんに愛想笑いを浮かべてそそくさとコンビニから退散する。しばらくここには来れないな、と美琴は肩を落とした。

ともあれ、これ以上ここにいるのも仕方がない、美琴はまっすぐに寮に帰ろうとして、あるものを視界に捉えた。

「あれは……………」

今出たばかりのコンビニの向かい側の道、帰宅途中の学生達の姿がちらほら見える中に、自分と同じ姿をした少女がポツンと突っ立っている。常人なら驚きや困惑に襲われて当然の光景にも、しかし美琴はそのどちらの感情も浮かばずに平然としていた。『とある事情』から自分と全く同じ顔をした妹達を彼女は知っているからだ。自分と同じ顔をした少女は何をする訳でもなくただただ突っ立っているが、人通りがそれほど多くないと立ち位置が道の端というのもあって通行の邪魔にはなっていない。

その少女がぼんやりと見つめているのは、両手で抱えた一匹の白猫だった。首輪とかがついていないのを見る限り、飼猫という訳ではなさそうだ。お腹でも減っているのか、抱えられて宙ぶらりんな猫は特に抵抗する事もなく小さくにゃーと鳴くだけだった。

「……？」

何をしているのか、と美琴は首を傾げつつも何となくその光景を眺めていたが、

ゴギンツ、という奇妙な音。

少女の抱える白猫の首から聞こえた音だった。

「——え？」

この瞬間、美琴の頭は真っ白になった。自分の目に映る光景が理解できなくなった。

いや、理解しなくなかったと言った方が正確か。

そう、その視覚情報を理解する事はできる。自分と同じ姿の少女は片手で白猫の胴体を、もう片方の手で頭を掴んで本来首が曲がるはずもないような角度に傾けようとしている。だというのに、猫は鳴き叫ぶような事もしない。最悪の予感が美琴の中を駆け巡る。

いや、最悪なのはこの光景だ。

少女に意識を注いでいた自分にしか、今何が行われているのか分かっていない。道行く人々は先程の嫌な音なんか聞こえていないし、少女の方に視線を向ける事もない。仮に向けたとしても、せいぜい中学生が猫と戯れている程度にしか思われない。それくらいの最悪さだった。

何を。

一体、何を——

「——一体何をしてんのよ、アンタは！！」

御坂美琴は全力で叫んでいた。通行人達がその大声に一齐に肩を震わせて美琴を見たが、そんな小さな事はどうでもよかった。

少女はようやく美琴の存在に気づいたように顔を上げ、その手からスルリと白猫が落ちる。どうやら大事には至らなかったようで、

猫は何とか地面に着地するとそのまま走り去っていった。

「……………」

少女は美琴を数秒だけ見つめると、踵を返してフラフラとその場から移動し始めた。

「ちよつ、待ちなさい！」

慌てて美琴は少女を追いかけたために駆け出した。

それほど距離はなかったはずなのに何故か何度もあの少女を見失ってしまった美琴は、それでも何とか見つけ出しては追い続けた。そうこうしてたどり着いたのは、建設途中のビルだった。八月三一日に鉄骨が崩れるという事故が起こったビルとは違う場所のものだ。まだほとんど完成していないらしく、ようやく骨組できたといった状態だった。所々には積み上げられた鉄骨やシャベルなども確認できる。

そんな場所で、その少女は美琴を待構えていたかのように立っていた。これ以上の逃走をする気はないらしい。

「……一体どういふつもりなのよ」

美琴は震えそうな声で問いかける。

「何で、あんな事しようとしたの？」

その声に覇気はない。他人が見れば、今の美琴の顔は信じていたものに裏切られた子供のように見えたことだろう。それだけ、先程の光景は彼女にとってショッキングなものだった。

と、

「……あんな事っていうのは、何を指して言っているの？」

目の前の少女が、不意に口を開いた。まじまじと美琴を見て、

「それに、何だかあなたとても悲しそうな顔をしているわ」

どうしたの？ と少女は小首を傾げる。

「アンタ……？」

ここに来て美琴は妙な違和感に襲われた。おかしい。眼前の少女は、美琴が知る妹達の特徴と一致しない。彼女達はこんな風には喋らないし、何というか、雰囲気などが全くの別人に思える。

そこで美琴はハッと気がついた。

（こいつ、電撃使いじゃない……？）

美琴達電撃使いができるのは何もビリビリアタックばかりではない。電子線や磁力線の流れを目で追ったり、電子ロックを解除したりと様々な面で応用が利く。その『様々な面』には、同系統の能力者を感じする、なんていうのもある。

だからこそ感覚的に分かる。目の前の少女は、その“同系統の能力者”に当てはまらない。

つまり、それが意味する事は、

「アンタ、妹達じゃないの？」

確認するように美琴は言う。それに少女はきょとんとして、

「シスターズ？ シスターって、妹って事よね？」

ビンゴだ。

こいつは、妹達ではない。

「……ああ、なるほど。あなたには妹がいたのね？ 私の姿を見ても驚いていないところを見ると、双子なのかしら？ 何にしても、そんな“情報”は『みんな』の中にはなかったはずだけど」

意味の分からない事をぶつぶつ呟く少女だが、何にせよあの光景を作り出したのが妹達ではなかったと分かっただけで美琴の中の一
番の錘は取り払われた。

その事実にあ堵するとともに、ふつふつと怒りが湧いてきた。

「で、妹達じゃないならアンタは一体どこの誰なのかしら？ 私のソックリさんにしては、気味が悪いくらい出来過ぎだと思うけど。肉体変化の能力者かしら？」

肉体変化は非常に発現が稀で、学園都市でもその数は三人しかないというが、遭遇する確率はゼロではない。

美琴の言葉に少女は妖しげに笑う。

「肉体変化？ …… そうね。分かりやすく言えばそんな感じかしら」
ふざけた奴だ、と美琴は思う。なんというか、飄々としていて掴み所がない。

「それが唯一の能力とはいえ、人の姿を真似るなんて悪趣味もいいトコね。しかもこの超電磁砲の御坂美琴の姿…… どういうつもりなのかしら？ 私の熱狂的なファンだとかそういうのでもなさそうだし」

「ふふっ、どういふつもりだと思う？」

「質問してんのはこっちよ」バチンツ、と美琴は前髪の辺りから青白い火花を散らし、「答えなさい。私の姿を真似て一体何をしようとした訳？ あの猫を殺そうとした理由は？」

猫？ と少女は虚空に視線を彷徨わせ、「ああ、」と思い出したような声を漏らした。

「別に、理由なんてないわ。ただ寄って来たから、遊んであげただけよ」

「なっ……！」

絶句する美琴に少女は言う。

「それで、あなたを真似ている理由？ 教えてあげてもいいけど、大体見当はついてるんじゃない？」

ぞわっ！！ という悪寒が走る。

少女を中心に、殺気という見えない感情が爆発的に広がっていく。空気すらも心なしに震えているような錯覚を覚える。

それを一身に受けつつも美琴は言う。

「まさか、私を倒して『本物』になる、なんてマンガみたいな展開じゃないでしょうね？」

「あら、よく分かったわね。ちょっと違うけど大体そんな感じよ」
無邪気に、無邪気そうに少女は笑う。嗤う。

「……学園都市第三位も随分と舐められたものね」

バチバチッ！ と美琴の周囲が帯電していく。彼女は感情を押し殺した声で、

「一つだけ、アンタに言っておくわ」

「なあに？」

こちらの神経を逆撫でするように聞き返す少女に、しかし美琴はすぐには応えない。

今彼女を支配しているのは、紛れもない怒り。目の前の少女の行為は、自分だけでなく妹達の存在すらも侮辱し、踏みにじるような最低なものだ。

だから、美琴はこの少女を許す事ができそうもない。

一度痛い目を見てもらおうとしよう。

美琴は言い放つ。

「御坂美琴ってのはね、アンタが考えているような安っぽい女じゃないのよ!!」

美琴の全身から、青白い紫電が撒き散らされた。

第三章 幻想鏡が映すもの

高圧電流の槍が美琴の前髪から放たれる。

御坂美琴の代名詞、超電磁砲はメダルゲームのコインなどを音速の三倍の速度で飛ばす事で凄まじい破壊力を持つ一撃を生み出す。対して、雷撃の槍は威力こそ超電磁砲に劣るものの速度の面ではこちらが勝る。どちらにしても、大抵の連中はろくに反応もできないまま沈むはずの一撃だった。

だが、今回は一撃では済まなかった。

雷撃の槍が少女に直撃する寸前、巨大な柱のようなものが地面から突き出る形で発生した。柱によって阻まれた一撃がズバン！！という轟音を炸裂させる。

砕けた柱の一部が、きらきらとクリスタルのような光を放つ。

そこで美琴は見た。自分の攻撃を阻んだ柱の正体は、氷。氷柱だ。それも半端じゃないくらいの大きさだ。雷撃の槍を受けきったところを見ると、強度の方も相当高いだろう。明らかに自然に作られたものではない。

（氷……？）

それを見た美琴は眉をひそめた。

あの氷柱。手加減したとはいえ、超能力者（レベル5）の一撃をまともに受けてビクともしていないとなると、かなり能力レベルは高い。それはいい。問題は、これを誰が作り出したかだ。

今、この場には美琴と少女（美琴と同じ姿をしているだけで少女なのかは知らないが）しかいない。となると、どこか近くに高レベルの能力者が潜んでいると考えるのが妥当だが、それは考えにくい。意識を周囲に向けてみても、それらしい気配や人影は見当たらない。だとすると、この氷柱を発生させたのは目の前の少女という事になる。しかしそれではおかしい。この少女の能力は肉体変化ではなかったのか？

様々な疑問を抱える美琴に対して、少女はクスクスと笑う。

「電気の力は初めて見たけど、案外大した事ないのね」

その物言いに美琴はカチンときたが、反論する前に少女が続ける。
「たとえ小さな力でも、たくさん集まれば大きな力になる……力を
合わせるって素敵よね。ふふふ」

少女は片手を肩の辺りに水平に上げて、

「さあ、もつと遊びましょう?」

横に薙いだ。

冷たいものを感じた美琴は反射的に上体を伏せる。

ビュオツ! と美琴の頭上を見えない何かが通過し、遅れてハラ
リと細い糸のようなものが数本舞った。

美琴の髪だ。

「…………ツ!」

嫌な汗が流れる。恐らく空気を操って不可視の刃を飛ばしたのだ
と適当に推測したが、

(空気? 氷じゃなくて? いや、それ以前にコイツ、複数の能力
を……!?)

「うふふふ。ほらほら、もつと早く動かないと当たっちゃうわよ」

「チツ!」

乱雑に腕が振るわれ、それに合わせて不可視の刃が美琴に飛来す
る。それを躲しつつ再び雷撃の槍を放つが、それも氷柱に阻まれる。

「調子に……乗んじゃないわよ!」

バチツ! と美琴の前髪から光が放たれる。すると、遠くで積み
上げられていた鉄骨が数本系に釣られたように浮かび上がる。電気
の力の応用、磁力を操っているのだ。

鉄骨を弾丸のような勢いで少女に向けて飛ばす。

ただし、狙いは少女本人ではなく、彼女が立っている場所の直前
の地面。

巨大な弾丸が聖剣のように地面に突き立つ。その瞬間、少女を包
み込むように粉塵が舞い上がる。

「…………ッ」

怯んだ少女は自分を守るように腕で顔を覆う。その一瞬の隙を美琴は見逃さなかった。

青白い紫電が撒き散らされ、音速を超える光速の雷撃が少女に迫る。

少女はハッとしたような顔をしたが今更遅い。タイミングは完璧。さらには先程よりも威力を上げた一撃。今から防ごうとしたところで防げるものではないし、避けるには時間が足りない。

そう、完璧だと思っていたからこそ、

少女の姿が消えた時、美琴は本気で驚いた。

「な…………ッ!？」

意図せずに驚愕が声となって現れる。

雷撃の槍は少女を突き刺す事なく空しく空を切って鉄骨を吹き飛ばしたただだった。突如として空間から消滅した少女を捜そうと美琴が辺りを見渡して、

「どうかしましたの、お姉様？」

聞き覚えのある声が背後から聞こえた。美琴が慌てて振り返ると、
「く、黒子？」

そこにいたのは美琴と同じく常盤台の制服を身に着けたツインテールの少女。後輩の白井黒子だった。

「何かお探しですのお姉様？ でしたら、わたくしの空間移動を頼ってくださいな。どこにでもすぐに連れて行って差し上げますわよ？」

そんな提案をしてくる白井。その声も、口調も、姿も、何もかもが美琴の記憶の中の『白井黒子』そのものだ。

だが、

「…………ふざけないで」

美琴の口から流れ出たのは、とても後輩に向けたものとは思えな

いほど、突き放した低い声だった。

「お姉様？ 何を——」

「ふざけんなつつてんのよ！」美琴は何か言おうとした『白井黒子』を一蹴し、「いい？ アンタは知らないみたいだから教えてあげる。“本物”の黒子は今病院に入院中よ。だからここにいる訳がない。……知り合いに化けて私を惑わそうって、浅い考えが丸見えよ」

美琴は白井を——“偽物”の白井を睨みつける。

「ったく、ム力つくのよね。アンタみたいに知った風な顔で他人の世界に入り込んでくる——いえ、違うわね。他人の世界をを踏み荒らしていくクソ野郎が！」

結局、美琴の憤りはそこに集結していた。

自分の大切なものを、こんな形で利用された事が、美琴は許せなかった。今までの疑問を全て吹き飛ばすほどに頭に血がのぼっていた。余計な思考も全て吹き飛んだ。

湧き上がる怒りに呼応するように美琴の周囲がバチバチと帯電する。

「その下らない変装を解きなさい。でなきゃ今すぐに沈めてあげる」
一氣にまくし立てた美琴の言葉を黙って聞いていた『白井』は、
「……残念ですわね」

瞬間、『白井の姿』が消し飛んだ。代わりに、別の人物がそこに現れる。

少女だった。先ほどまでの『御坂美琴の姿』とは違うが、外見を見る限り、歳は美琴とそう変わらないだろう。身に着けているのはワンピースのような白を基調とした服。腰よりも長い白銀の髪、透き通るような白い肌、そして美少女と呼ぶにふさわしい幼さを残す顔立ちは、まるで雪の精のようでもあった。

幻想的な美しさを醸し出す外見だが、これが本人のものなのか、はたまた全く別の誰かのものなのかは美琴には判断がつかなかった。
白い少女は肩を竦めて言う。

「んー、ちょっとは動揺して面白くなるかと思ったけど、逆効果だったみたいね。それにしても、あんまりな態度じゃない？ 後輩なんでしょう？」

「誰だつて本物とパチモンの区別くらいつけるわ」

「言うわね。『あながち偽物とも言い切れないかもしれないのに』」
何？ と美琴は眉をひそめるが、少女はそれ以上語るつもりはな
いらなかった。

「じゃ、続きを始めましょうか？」

すつと持ち上げられた右手が開かれる。すると、美琴の体が宙へ
と浮かび上がっていく。

「なんつ……！？」

「ふふふ、飛びなさい」

少女が腕を振ると同時、美琴の体が野球のボールのように勢い良
く飛ばされる。

その直線上には、組み上げられた鉄骨の山がある。この速度で叩
き付けられたら――

「――冗談じゃ、ないわよっ！」

バチツと美琴の前髪が弾ける。

地面が大きく盛り上がった。いや、正確にはそこに含まれる大量
の砂鉄だ。それらは漆黒の剣と化し、蛇のような動きで舞い上がる
と、空中に大きく展開される。そこに美琴がまともに突っ込んだ。

ボスン！ と漆黒が間抜けな音を立てる。砂鉄をクッションとし
たおかげで、美琴は無傷だった。

「へえっ？」

それを見た少女が感嘆とも驚きとも取れる声を上げる。

地面に着地した美琴の手に、漆黒の剣が握られる。

「電気つてのはね、意外とあれこれ応用が利くのよ。こんな感じに
ね！」

美琴の手から大蛇が飛び出した。ぐねぐねと空中で動き回り、少
女へと向かっていく。砂鉄と言ってもその威力はまさに刃。岩をも

容易く切り裂く一撃だ。

そんな一撃を、

少女は無造作に”掴み取って“みせた。

「——ッ!？」

今度こそ、美琴の表情が驚愕に染まる。

当てるつもりはなかった。寸でのところで狙いを逸らす前に捕まったのだ。

あり得なかった。少女がしている行為は、素手で回転するチェンソーを掴むのと大差ない。とある少年の右手のような例外でもない限り、そんな行動は自殺行為でしかない。

実際、砂鉄を握る少女の手のひらからは大量の血が流れ落ちていた。だというのに、彼女自身はまるでそこに転がっている石ころを見るような目で垂れ流される自分の血を眺めていた。

砂鉄の剣が霧散する。

少女が何かした訳ではない。美琴自身が、無意識のうちに能力を解いていた。

「……ふ。ふふふ」

少女は自分の血まみれの手のひらを舐め、口の端を引き裂いて笑った。まるで極上のソースでも味わったような顔だった。

美琴はその光景を見て絶句したが、

「まだまだ、遊び足りないわ」

少女はおもむろに赤い手のひらを縦に掲げる。そこから、何かが生まれた。

人形だった。ウサギや羊など、中サイズの人形が幾つか。しかしその外見に愛らしさは微塵もない。不必要に大きな目玉や口が見た者に抱かせるのはただ圧倒的な不気味さだ。そこからばたと垂れ流される黒い液体は、涎や涙ではなく血を連想させた。世の中にはこういうものを好む人間もいるのだろうが、美琴からすればひたすら悪趣味の一言に尽きる。

「ふふ、あははは。さあ、行きなさい」

少女の声に応えて人形達が美琴へと飛ぶ。

これに何の意味があるのか、と美琴が身構えると、人形の一つが火を吹いた。

「つて、わっ!？」

慌ててその場から飛び退く。

追いつがる人形達は、様々な攻撃を繰り返した。火を吹くもの、氷を放つもの、真空の刃を飛ばすもの、砂利を操るもの——その人形の全てが、何らかの『能力』の持ち主であった。

（つたく、何なのよこいつら!? 何らかの遠隔操作? こんな訳の分からない攻撃見た事が…… っと!?)

敵の戦力分析をしていた美琴の眼前を炎が通過する。

「だあっ! うつとうしい!」

美琴の前髪から雷撃の槍が数発放たれた。雷撃は瞬く間に宙を飛び回る人形達に直撃する。

バチンッ、と焦げ臭い匂いが広がる。と、

『ゴオオオオアああアッ!!!』

『ギゴアアアウオアアッ!!!』

「っ、な、なに!？」

雷撃を受けた人形達が、絶叫を放った。耳をつんざぐような苦痛の叫びの後、ぼとぼとと地面に落ちていく。

『……イ、た……おオ……』

『うあ、……アアア……』

美琴の耳に、怨嗟のような呻き声が届く。

地面に落ちた人形が出しているものだった。

（何だつてのよ……?）

この人形達が少女の能力によって作られたものなら、美琴の攻撃を喰った時点で消滅してもいいはずだ。だというのに、人形は消えないどころか、これではまるで人形そのものに意思があるようではないか。

くすくすと少女の笑い声がした。

「アラアラ、もうやられちゃったの？ さすがは超能力者（レベル5）……でも、」

残忍な笑みを顔に張り付けて、

「これじゃあつまらないわ」

少女の目が大きく見開かれる。

美琴が落としたもの、まだ宙を漂っていたもの。全ての人形達が数メートル上空に集められ、

「やるなら、これくらいやらなくちゃ♪」

ぐちゅっ、と肉が潰れるような音がした。

人形達が、一つ残らず潰され、引き裂かれた音だった。

「……ッ！」

美琴の中の何かが、大きく揺さぶられた。

空から、人形達の欠片と、黒い液体が雨のように降り注ぐ。一滴が肌に触れると、ゾツとするほどの冷たさだった。

黒い雨を降らせた張本人は、白銀の髪を黒に染めながら嗤う。

[illegible]

壊れたように、狂ったように。今この瞬間が楽しくてたまらない
とでもいうように白い少女はひたすらに嗤い続ける。まるで悪夢で
も見せられているような気分だった。

何となく、思い知らされた。

この少女は美琴とは明らかに違う。異常と言っていい。能力がどうのというレベルではない。人格自体が既に取り返しのかからないほ

どに壊れている。でなければ、追いつめられた訳でもないのに自分が出した攻撃を自分の手で粉々に砕いてしまうような真似はしない。恐らくこの少女には、美琴の持つどんな常識も通用しない。そんなものを笑って破壊するような、そんな精神の持ち主だ。

胃の辺りからジワジワとした恐怖が昇ってくる。

こいつは、ヤバい。

「——ッ！」

美琴は手を握り締めた手を突き出した。その親指には、一枚のコインが乗せられている。

超電磁砲。

御坂美琴の代名詞にして、学園都市第三位の実力を裏付ける、最強クラスの一撃。後は親指を軽く弾けば、音速の三倍の速度でコインは少女に向かって撃ち出される事になる。

少女は狂笑を止め、美琴を見る。

「あら……それが噂の超電磁砲かしら？ とても強いよね。学園都市でも上から三番目の実力者の最強の超能力だものね」

全く動じていなかった。まるで世間話でもするような気軽さだった。

んー、と少女は首を傾けて、

「そうね……なら、こういうのはどうかしら？」

そう言うと、少女は片手を水平に上げた。

瞬間、空間に輝きが生まれた。

赤青緑紫黄……様々な色の淡い輝きはそれぞれがテニスボール程度の大きさだった。その光が少女の手のひらに一点収束する。

ビリビリ、と空間が振動した。

そして、少女の手のひらには、小さな、しかし強烈な輝きを放つ光球が浮かんでいた。

見た目に騙されてはいけない。“アレ”には、凄まじい力が込められている。能力者としてではなく、一人の生物として美琴は直感的にそう悟った。

「色んな能力を混ぜ合わせてつくつたの。貴女の超電磁砲とどっちが強いかしら？」

挑発されていた。

「ッ！ 上等じゃないの……！！」

美琴は迷わなかった。

刹那、二人の少女から閃光が噴き出した。

オレンジと光。互いの最高の一撃は空間を喰い千切り、地面を抉り、真正面からぶつかり合った。

拮抗はしなかった。

二つの閃光は、超電磁砲を押し退ける形で決着がついた。

――

美琴が何を思う暇もない。

超電磁砲を喰い破った光の塊は、その威力を弱める事なく突き進む。

そして、

ゴッギイイイ！！ という凄まじい音。

突然横から割り込んだ少年の右手が、破壊の一撃を防いでいた。

巨大な光の力は、それを受け止めた少年を吹き飛ばそうと右手の中で暴れ狂う。が、どうにか押さえ込む。硝子が砕けるような音とともに、光は粉々に散った。

「御坂、大丈夫か！？」

上条はそう言つと、視線だけをこちらへと投げる。無事な美琴の姿を確認すると、小さく息を吐いた。

「よかった、どうにか間に合ったみたいだな」

「あ、アンタ、何で……」

「何でも何も、あんだだけ派手にドンパチやってれば嫌でも場所を教

えられてるようなもんだろ。闇雲に街ん中走り回っても分かったしな。多分もう通報もされてる。もう少ししたら警備員が飛んで来るんじゃないか？」

そこで上条は、眼前の少女に向き直る。

「デメエが鏡映しか？」

上条は短く問うた。

ここにきて、少女に初めてマイナスの表情が浮かんだ。

顔をしかめたのだ。

「鏡映し……そう。確かに……そう、呼ばれてもいたわね」

その表情が何を意味するものなのか、上条には分からない。

彼は続けて言う。

「大体の事情は聞いてる。学園都市中の人間を襲ってるってな。俺はそれを止めに来た」

「止める？ 貴方が？ 私を？ できるのかしら？」

チャンスだと上条は思った。相手は幻想殺しの存在を知らない。あの光を打ち消したのを見た程度では、幻想殺しについては何も分からないだろう。土御門の話なら、相手は異能の力の塊だ。鏡映しがどんな力を持っているのか上条は知らないが、この右手で触れれば全てが終わるというのなら、今が絶好の機会だ。

上条は一気に駆け出そうとして、

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ！」

美琴に止められた。何だよ？ と美琴を見る。

「どういう事なのよ？ ドッペルゲンガーって何？ きちんと説明しなさいよ！」

“いつもの調子で”美琴がそんな事を言う。

「は？ えーっと、詳しい説明は省くけど、ドッペルゲンガーってのは……あー、なんつーか、あの女的能力だ。お前も見たと思うが、あいつの能力は普通じゃない。でも、俺ならあいつをどうにかできる。簡単に言えばそういう事だ。だから御坂、お前は下がってろ」

「冗談じゃないわよ！」

上条の説明に美琴は叫んだ。叫べるほどの元気を取り戻していた。
「いつもいつも訳分かんないまま勝手に事件に突っ込んで解決して、少しは取り残されるこっちの身にもなりなさいよ！」

美琴は一步前へと踏み出し、

「逃げるですって？ それはこっちの台詞よ！ 超能力者が無能力者に任せて逃げるなんて、馬鹿にするのもいい加減にしなさい！それに、あいつの相手は私よ。いちいちアンタに口出される事じゃないわ！」

「ばっ、馬鹿！ 本当に危ないんだっての！」

そのまま二人はギヤーギヤー言い争いを始める。完全に隙だらけなのだが、鏡映しはポカンとして二人のやり取りを眺めているだけだった。

やがて、無駄に体力を消耗した二人がぐったりしながら、

「……やめようぜ御坂。何か無性に疲れた」

「……そうね。何かすっごく不毛なやり取りをした気分」

「いや、それを言ったらいつも俺に突っ掛かってくるお前の行動自体不毛の権化と言えるんじゃない——」

「うっさい」

はぁ、と二人は息を吐く。そして同時に鏡映しをまっすぐに見据え、

「やるわよ」

「ああ」

上条は拳を握り、美琴はバチバチと前髪から火花を散らす。
そんな上条達を見て、鏡映しは再び笑みを浮かべた。

第三章 幻想鏡が映すもの 2

真っ向から対峙する上条と美琴に対し、純白の少女はくっくく、と喉を鳴らして笑った。

「いいわね」

狂気めいたものが張り付けられた表情で二人を交互に見やり、「やっぱり”遊び”は大勢でした方が楽しいわよね。安心して、飛び入り参加だからって拒んだりはいしないわよ？」

迎え入れるように大きく広げた両腕を、

「さあ、パーティーの再開よ！」

勢い良く突き出してきた。

瞬間。

空気が吹き荒れるのを感じた。微かに視認できる程度まで圧縮された無色の力の塊が、砲弾のような威力と速度で真っ直ぐに飛んでくる。

『！！』

上条と美琴はそれぞれ左右に飛びずさってそれを避ける。するとその進路に立ち塞がるように宙に浮かぶ不気味な人形達が群がってきた。

「？　なんだコイツら――うおっ！？」

上条が反射的に首を傾けると、やたら熱いものが耳元を通過していったのを感じ取った。

数多の人形のうちの 하나가、炎を吐いたのだ。いや、炎だけではない。氷や風など、様々な属性の攻撃を次々と放ってくる。

「気をつけなさい！　こいつらはただの人形じゃない。多分あの女の能力よ！」

虫を払うように雷撃で人形達をまとめて打ち落しながら美琴が叫ぶ。

「くそっ、こんなヘンテコな能力まであるのかよ！　っっーかもっ

と早く言えよなそういう事は!!」

舌打ちしたいがそんな暇もない。襲い来る攻撃を右手で打ち消し、あるいは上体を伏せたりしながらどうにかかい潜る。

「くっ!」

このままでは防戦一方だ。そう思った上条は手近な人形へと突撃する。正面からの攻撃をぐるりと身をひねってかわし、ほとんどがむしやらに右手を伸ばす。

瞬間、爆弾が炸裂したように、ぬいぐるみの形をした怪物は粉々に砕け散る。

幻想殺し。

少年の右手に宿る能力は、それが異能の力であれば神様の奇跡だって触れただけで打ち消せる。

「――」

その光景を見た鏡映しが目を細める。新種の昆虫でも観察しているような目だった。

（消えた……って事は、本当にあいつの能力みたいだな。まったく、なんつー悪趣味な外見だよ!）

右手を振り回しながら上条は内心悪態をつく。

美琴の雷撃との連携により、人形はその数をどんどん減らしていく。しかしどこから湧いてくるのか、一体消えればそれを補う形で新たな一体が出現する。まるでスコアを競わせるために敢えて無限に敵を登場させるシューティングゲームのようだった。

（ちくしょう、キリがない! やっぱり力を使ってる能力者自身をどうにかしねえと――!?!）

そんな風に考えていた上条の心臓が凍った。

原因は一人の少女。

真っ白な少女の顔が、上条の目の前にあった。

「ふふ……」

鏡映しはうつすらと笑みを浮かべた。

まるでイタズラが成功して喜ぶ子供のように。

上条の反応を楽しむように。

(なんつ、こいつ、いつの間に……ッ!?)

人形達に気を取られていたとはいえ、鏡映しに対する警戒が皆無だった訳ではない。注意してても反応できない、まさに刹那の速さで、数メートルの距離を一気に縮めたのだ。

「面白いわね、あなた……」

ずっと伸びてきた少女の両手が、上条の頬を撫でる。その凍りのような冷たさに、彼の体が強張った。

「どうなってるのかしらね、その右手……」

そう呟きながら、ただでさえ至近距離の鏡映しの顔がさらに近づいてくる。吐息のかかる距離で、まるで口づけでもしそうな動きだった。

「なっ——」

上条の体が先ほどとは違う意味で強張る。右手をぶち当てる絶好の機会だというのに、何故か体は金縛りにあったように動いてくれない。

「なっ、なに、何をやってんのよアンタ達は!?!」

ふと、そんな声とバチンツというスパーク音が耳を打った。それと同時に鏡映しが目の前から消え失せる。そして一気に広がった上条の視界に飛び込んできたのは、こちら目掛けて真っ直ぐに飛んでくる雷撃の槍。^{レリレリ}

「おおおおおおッ!?!」

咄嗟に右手を前に突き出す。避雷針のように右手に吸い込まれた雷撃が四方八方に飛び散った。

まさか味方から攻撃を食らわされる羽目になるとは思ってもみなかった上条当麻は心臓をバクバク言わせながら抗議の声を上げる。

「危な————っ!?! てっ、テメエ何すんだ!?!」

「こ、こんな時にアホな事やってるアンタが悪いんでしょ!?!」

「何だよその意味の分からない切れ方! つーかそれだけで人に向かってビリビリ撃つな!?! 危うく上条さんは黒焦げ寸前ですハイ

!!」

なんか顔を赤らめる美琴に対してちよっぴり涙目な上条。よく分からぬが、恩を仇で返された気分だった。

「楽しそうね」

透き通るようなその声に、二人はハツとなつてそちらを振り向く。上条と美琴と等距離の位置に鏡映しが悠然と佇んでいる。

「仲間外れは寂しいわ。私も仲間に入れて頂戴？」

相も変わらず、他人をこけにしたような、飄々とした態度。そこには余裕過ぎる程の余裕を孕んでいる。気がつけばいつの間にか上条達を包囲していた人形達が消え去っていた。相手の心理的ゆとり故か、それとも単に”人形遊び”に飽きただけかもしれない。

「空間移動、か。ちくしょう、本当に何でも能力が使えんのか」

苦い顔で呟く上条。それを見た美琴が怪訝そうに眉根を寄せる。

「ねえ、何かアイツについて知っている事があるなら教えておいてくれない？ さっきから情報不足で気持ち悪いのよ。確かさっきもドッペルゲンガーとか言つてたわよね、アンタ。何なのよそれ」

鏡映しに対する警戒はそのままに、心なし小声で彼女はそう尋ねてきた。

「……簡単に言えば、変幻自在な多重能力者つてところだ」

「その情報は正確ではないわね」

上条の言葉を補足したのは、他ならぬ鏡映し本人だ。

「もともと私には何の力もない、真っ白な状態。でも、真っ白だからこそそこから様々な色に染める事ができる。他人から人格や意識といった形で能力を剥ぎ取ってそれを取り込む。だからそれ以上の事はできない。奪い取ればそれだけ色々できるようになるけど、逆に言えば奪わなきゃ何もできないのよ。最初から多重な使い分けなんかできないわ。まあ、ここにいる『私』の姿が変幻自在なのは否定しないけど。それこそ犬猫にだってなれるわよ。何ならやってみせましょうか？」

つらつらと言葉を連ねていく白い少女。その様子に上条は違和感

を覚えた。

（何だ……？）

何というか、雰囲気が少し変わった気がする。つい今し方まで無邪気な幼子のような感じが突然ガラリと色合いを変えて、まったくの別人を相手にしているような感覚に陥ったのだ。

「意識から能力を取り込んで……？　まさか、さっきの空間移動は……」

と、不意に美琴がハツとなった。

「まさか、”アレ”はアンタのせいだっていうの？　今黒子が病院で意識不明になってるのは、アンタが……？」

「意識不明だつて？」

美琴の言葉に上条が眉根を寄せる。

黒子というのは、御坂美琴の後輩の白井黒子の事だろう。風紀委員であり、大能力の『空間移動』能力者である彼女が意識不明というのは初耳だが、

「そうか、だからあの空間移動……」

おそらく白井黒子は鏡映しに襲われ、意識を剥ぎ取られたのだろう。その結果、彼女は美琴が言うような意識不明の状態に陥り、鏡映しは『空間移動』という力を得た。そして能力と意識がワンセットな以上、今鏡映しの中には人間『白井黒子』と同様の人格が存在している事になる。

「そうよ、ようやく気がついた？　私は——つて、あ……？」

と、今まで余裕そうに笑みを浮かべていた鏡映しが、不意に頭を抑えた。

「あら、あれ、あ、レ？　——アア、駄目、ダメ、だめ。何んだか急に頭が痛い。……痛い？　違う、チガウ……？」

何やらぼんやりとした表情で、うわごとのようにぶつぶつと呟いていたが、

「……アア、駄目。駄目だ。もう面倒臭い」
顔が上がる。

二つの目が上条と美琴を捉える。

暗い、翳った瞳がゆらりと蠢き、怨嗟のような低い声。

「死ね」

突然だった。ただでさえ薄暗かった周囲に、さらに深い影が落ちた。原因は頭上。平べったい形をした氷塊が屋根のように浮いていた。この場にいる人間全員を押し潰せそうな大きさだった。

その屋根が、落ちる。

視覚で捉えている以上のリアルな重量感を持って、上条達を押し潰そうと垂直に落下してくる。

（上！！）

上条は右手を真上に掲げる。

だが、

落下してくる氷塊が、音を立てて弾けた。

「な……っ!？」

ただ単に砕け散った訳ではない。砕けた巨大な氷は、鋭い杭のような、氷柱のような形状に変化し、一斉に降り注ぐ。面を塗り潰すような攻撃から微かな隙間だけを残したそれは、ほとんど槍の雨だった。

これは右手一本では防ぎきれない。

かといって、攻撃範囲から逃れるには時間が足りない。

「ッー!!」

咄嗟に反応したのは美琴だ。

彼女の意志に呼応して、地面がぶわっ！と吹き上がる。いや、正確にはそこに含まれる砂鉄だ。小さな波のようでありながら、意志を持つ生き物のようでもあったそれが、聖剣のように突き立っていたいくつかの鉄骨を覆っていく。砂鉄のコーティングを受けた鉄骨がパズルのようにガツチリと一塊になるのを見計らって、美琴がそれを手繰り寄せる。

そして、

「飛んでけええええ!!」

ドバツ!! という轟音が響き渡る。

真っ黒で大きな塊が、上空へと発射された。

コインではなく、鉄骨という巨大な砲弾を使った一撃は、まさに壮絶の一言に尽きる。氷の雨も何も関係なく、障害にもせず、砲弾は重量に逆らうように天へと昇っていく。

降り注ぐ雨に、ぼっかりとした穴が生まれた。

「こつち!」

その光景に半ば呆然としていた上条の耳に美琴の叫びが飛び込んできく。彼は迷わずに美琴の元へと駆けた。唯一出来上がった安全地帯へと体を滑り込ませる。

遅れて、氷の雨が降り注いだ。

一本一本が杭のように地面を穿っていく。しばし突き刺さったままだったそれらは、やがて溶けるように消えていき、後にはモグラが掘ったような穴がいくつも残された。

「悪い御坂、助かった」

「貸し一つだからね」

短く言葉を交わした二人は、改めて目の前の敵を見る。不思議とその一人の周りだけ穴がなかった。

「あ? 何だ、まだ、……………あれ、何だったかしら?」

白い少女は頭を抑えていた手を離し、首を傾げた。それから上条達の視線に気がつくと、口の端を持ち上げた。

「ああ、まだ遊んでくれるの? うふふ、嬉しいわ」

自分がした事を自覚していない口調だった。

人間二人を殺そうとしておいて、出てきた言葉がそれだった。カッとなりそうな頭を冷静にするよう努めて、上条は美琴に耳打ちする。

「御坂、あいつの注意を引き付けられるか?」

「何ですって?」

「できる限りでいい。あいつの注意が少しでもお前に向くようにしてほしい」

「……何か作戦でもあるわけ？」

「作戦なんて大層なもんじゃねえよ。お前に隙を作ってもらって、俺がそこに突っ込む。それだけだ」

空間を自在に移動できる以上、下手に動き回れるとたちまち勝機を失ってしまう。ならば能力を使わせない程度に他に注意を向けさせて意識を削ぐ。そのためには美琴のような派手で威力もある能力の方が上条のような無能力者より適任だろう。困にするようで、あまり気分のいい提案ではないが。

美琴は呆れや思案やらが無い交ぜになったような複雑な表情を浮かべたが、

「……いいわよ。ただし、こつちも獲物を譲るってんだからそれ相応の成果はあげてきなさい。あと、うやむやな事情もキツチリと後で説明する事。いいわね」

上条は小さく首肯する。

「それじゃ、派手に行くわよ!!」

バチリ、と少女の前髪から紫電が散る。それは青白い閃光となつて純白の人影目掛けて突き進んでいく。だが無駄だった。見えない壁のようなものが、雷撃の槍を遮断してしまった。

それでも、御坂美琴は攻撃の手を緩めない。彼女は姿勢を低くすると、地面に手の平を押し付けた。そこから小さな竜巻のように渦巻く黒い砂鉄が発生した。竜巻はたちまち分裂し、蛇のように伸び襲いかかる。さらにそれを追いかける形で雷撃を連射。結果、土煙を舞い上げ、重火器以上のパワーの一斉砲火の光景が生まれる。

攻撃が中断された。

美琴の額にはうつすらと汗が滲み、小さく肩で息をしていた。極度に能力を行使した事による疲労が形として表れたのだ。

土煙が晴れる。

そこには、多少衣服を汚しただけの白い少女が一人。

「流石に、ちょっとびっくりしちゃったけど……これでお終いかしら？」

「……………」

美琴は答えない。その沈黙を肯定と受け取ったのか、鏡映しの口の端がつり上がった。

「じゃあ、今度はこっちの番かしら……………あら？」

と、反撃に移ろうとしていた鏡映しの動きが止まった。
いない。

御坂美琴の傍にいた、あの少年の姿がない。

さらに彼女は気づく。

美琴の表情に、勝利を確信した者特有の力強い笑みが浮かんでいた事を。

「まさ……………っ!？」

鋭く後ろを振り返る。

そこには美琴の攻撃に気を取られていた彼女の背後に回り込んだ、上条当麻の姿があった。

すでに少年の右拳は握られている。互いの距離も、掴もうと思えばあっさりと掴めるくらいのものでしかない。

「っ! 避け——!!」

「遅っせえ!!」

上条の右の拳が思いつ切り突き出された。

鏡映しの顔が強張る。自分へと迫る一撃に、本能的な部分で明確な脅威を感じていた。

彼女は首を全力で振ってこれを躲した。初めて、能力を使わないまま行動に出た。結果として、ツンツン頭の少年の右手は少女には当たらず、その長く艶やかな白い髪を僅かに掠める程度に到った。

直後、鏡映しのカラダが”ブレる”。物を急に動かした瞬間をスローモーションで眺めたような、だからこそはつきりと認識できる大きな『揺れ』だった。

「が、あ……………っ」

二、三歩鏡映しが後退る。頭痛でもするのか、抱え込むような形で頭を押さえながら。

異能の塊である存在が、幻想殺しに反応している。

だ
が、

(ちくしょう、後味悪いな)

見れば見るほど、目の前の存在がただの少女に見えてくる。いや、事実人格的な面を考えればこの少女は『人間』なのだ。どこかの能力者自身が暴走させてしまった、元人間。

例えばそれは、あの風斬氷華とどこが違うだろうか。あの気弱で優しく、A I M拡散力場の集合体でありながら人間の心を持つ少女と、一体どれだけの違いがあるだろうか。

そして、その幻想を打ち砕こうとしている自分は。

それを思うと、苦いものが胸の中に広がる。

（それでも、躊躇う訳にはいかない）

このまま彼女を野放しにしてしまえば、より多くの犠牲を出す事になる。それを止めるためには、今ここで終わらせてやるしかない。（もともとあるべき場所に帰してやるだけだ。あるべき形に戻してやるだけだ。……分かつちやいるけど、やっぱり割り切れないな）

ともあれ、上条は右手を少女へと伸ばす。

「.....ち.....」

ふと、鏡映しが呻いた。

上条は怪訝そうに眉を顰める。

直後、

「いやあああああああああああああああああッ！！」

声が爆発した。

と上条の体が大きく吹き飛ばされた。

「ふっ……っ！？」

見えない巨人の手に突き飛ばされたように数メートルほど後ろに飛んだ彼の口から息が吹き出され、一瞬呼吸が止まった。

「ちよ、ちよつと大丈夫!？」

美琴が駆け寄ってくる。

体を起こした上条は鏡映しを見た。

「何が……！？」

そこで彼の言葉は途切れた。

視線の先には、鏡映しがある。だが様子がおかしかった。額には汗がびっしりと浮かび、顔は元の白さ以上に青ざめ、何かに怯えるように表情を引き攣らせてへたり込んでいる。その瞳は鬼気迫る感じでガクガクと不安定に揺れていた。上条達の事など全く見えていないに違いなかった。

「いや、やめて、もうイヤ、これ以上傷つけないで、イジメナイデ、私は、わたしは、ワタシハ――！ イヤ、イヤアああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！」

引き裂くような絶叫が迸った。

ボバツ！！ と彼女の周辺の空間が丸ごと爆発した。地面に巨大なクレーターが生まれ、建設用具を片っ端から薙ぎ払っていく。

上条と美琴は、その光景を呆然と見つめていた。

彼らは知らなかった。

最強の超能力者を取り込めば最強の超能力を、世界最高の魔術師を取り込めば世界最高の魔術の知識を得られる。

そんな鏡映しの、致命的な欠陥を。

行間

きっかけは些細な事だった。

彼女は学園都市に住む、ごくごく普通の少女だった。大して有名でもない中学校に通い、それなりに充実した人生を歩んできた。学園都市の人間にとって自身の心の支えとも言える能力のレベルを見ても、多少珍しいものなだけでそれほど高くはない。せいぜいが異能力が強能力程度のものだと、担当の教師からは言われた。けれど別に悔しくはなかった。少女は能力に対してそれほど入れ込んでいた訳でもないし、別にないなら困りもしないと思っていた。

だから、その日まで少女は普通に過ごしていた。

ある日の話だ。少女の親友が、学校の先輩にイジメを受けている現場を目撃してしまった。その先輩の事は少女も知っていた。少女が通う学校の中で最も能力が高く、将来を期待された秀才として有名だった人物だ。だからこそ、その秀才が陰でイジメなんて行っている事が、最初は信じられなかった。

恐かったが、もちろん少女は親友をかばった。こんな事はやめてくださいと、素直にそう言った。

その日から、少女の日常は変わった。

楽しい『お遊び』に水を差された先輩が、今度は少女もイジメの標的として狙ってきたのだ。

イジメの内容は日々エスカレートしていった。それでも少女と親友は耐えた。耐え続けた。だが、その陰湿なイジメを耐えられるだけの精神があだとなり、二人の心は徐々に擦り切れていった。

反抗しようにも、先輩に多くのイジメ仲間がいたため、それも叶わなかった。

教師に報告しようにも、確固たる証拠は残されてはおらず、さらに先輩の日々の生活態度が良好だったこともあって信じてもらえず、

聞く耳を持たなかった。

結局、少女達は二人ぼっちになった。

しかしそんなイジメに苦しむ日々も、ある日ある時終わりを告げる。

窮鼠猫を囓む、とでも言うのだろうか。ふとした拍子に先輩が見せた僅かな油断、微かな隙を少女は見逃さなかった。少女は能力を使用し、学校で一番の使い手である先輩を打ち倒した。完全なる不意打ちとはいえ、確かに打倒してみせたのだ。後の事など考えていなかった。ただ目の前の脅威を取り除かなければ、いつか自分達は壊れてしまう。だからがむしゃらに力を振るった。いつそ殺してしまうのではないかというくらいの勢いで。

先輩は倒れた。死んではいなかっただろうが、重傷は確かだった。意識などとうの昔に飛んでいたに違いなかった。

少女は笑った。久しぶりに心からの笑顔を作った。これでやっと自分達は苦しみの日々から解放される。もう何にも脅かされることのない、普通の生活が戻ってくる。少女はそう信じて疑わなかった。だから、少女はその事を告げられた時の親友の顔が、言葉が忘れられなかった。

——どうして、そんな事をしたの？

二人を苦しめていた元凶がいなくなった。なのに、親友の表情は晴れなかった。

——どうして、そこまでする必要があったの？

その目は、自分を責めているようだった。

——どうして、そんな方法で解決しようとしたの？

その声は、どこか悲しげですらあった。

とす。これだけならばキャンバス上の色は二色だが、この二つの色を混ぜれば、全く違う色になる。それを繰り返していけば、元の色など分からなくなる。

例えば、それは多重人格。

いくつかの人格がきちんと『切り替わる』なら問題はないが、それが『混線』してしまったら？ 自分ではない自分が、内側にいるのだと仮定したら？

先輩は少女が憎い。しかし今の少女には先輩の人格もある。つまり、少女は自分自身が憎いというある種激しい自己嫌悪にも似た状態に陥った。知りたくもない真つ黒な醜い感情が、取り留めもなく内側から溢れかえる。そんな事を考えたくもないのに、無理矢理考えさせられる。もはや拷問とも言えた。

少女が自分を強く持っていれば、きちんと『仕分け』できたはずだ。

だが、親友に突き放され、心を乱した彼女にはそれができなかった。

そうして、その日少女は壊れた。

錯乱し、発狂し、狂乱した。自身の中の黒い感情に振り回され、手当たり次第に人を襲った。自分の意志では止められず、そもそも人を狩る度に自分の意志などどこにあるのか分からなくなっていた。

しかもネックだったのは、少女が倒した相手が能力者だった場合、その人の人格と一緒に能力までオマケとしてついてきた事だ。これにより少女の分身はさらに助長し、止められる者がいなくなっていた。

最後には混線した分身に意識を吸われ、本体である少女の方はほとんど植物状態に陥ってしまった。

それでも、いつからか分身の中の意識はある程度の安定を得ていた。あまりに多くのも意識が混ざり、融合したせいで、一種のあらたなる人格を形成したのだ。

オリジナルバージョンナリテイ

すなわち、壊れた人格。

言葉として成立していかないかもしれないが、結果としてはそういう事になる。元の少女をベースとして、年齢も性別も異なる人々の感情が新たな色を築き上げた。

少女が成す事に意味はなく、少女がする事に目的などない。脈絡なく笑い、泣き、気に入る気に入らないに関わらず全てを愛でて破壊する。

それでも、いかに崩壊した人格であろうとも、一応は安定してはいたのだ。細い綱を渡るような極めて危険なものではあっても、言葉話し認識ができるだけまだマシと言えた。

だが、その僅かな均衡も崩れた。

とある少年の右手の力によって。

溜め込んだものを吐き出すように、少女の姿をしたソレは暴走を始める。

第四章 その想いの果て

「さて」

学園都市にある高層ビルの一角、その屋上にて女は一人静かに笑う。

その手に握られた双眼鏡の向こうには、何の変哲もない建設途中のビルがある。しかし女が見ているのはビルそのものではなく、その場にいる数名の少年少女達だ。

子供同士が夜遊びしている、というのは明らかに違う。まるで戦場のような、ピリピリとした険悪で険呑な雰囲気は一触即発といった言葉が似つかわしい状況だということを必要以上に訴えてくる。もつとも、今の自分は『観客』の立場にあると自覚し、またそう徹することに決めていた女としては、彼らの状況がどう動いたところでこれといった介入をするつもりは微塵もないのだが。

それに、その必要もないだろう。

全てを理解した上で、女は口の中だけで小さく呟く。

「そろそろ決着かな」

重圧の壁のようなものが、周囲一帯に広がっていく。

台風の目のようにその中心にいるのは、一人の少女。

いや、少女の姿をした——もつと歪な『何か』。

「がああああああああアアアアアああああああああああ
ああアアああアああアああああああアアアアッ！！！！」

咆哮。

ボバッ！！と。

鼓膜を震わせる絶叫に感化されるように、得体の知れない力が放射される。周囲にある建物の壁が地震に遭ったようにグラグラと揺れ、放たれる力に地面がミシミシと痛め付けられているのが分かる。月面にあるクレーターのような窪みから、蜘蛛の巣のような亀裂を生じさせていく。

「……………」

上条当麻と御坂美琴は、その光景を呆然と眺めていた。あまりにも非常識な光景に、しばし目を奪われていた。

一体あの少女に何が起きているのか、何が起きたのか、これだけ近くにいてその様子を捉える事ができるのに、正しい認識ができない。

あるいは、少女の心の内が、『力』という形で爆発したのだろうか。

イライラやストレスなどの感情を、暴力などによって発散するよう。

「ッー！」

いち早く我に返った上条が、鏡映しに向かって突撃した。

ギョロリと、見た目の過激さとは裏腹に機械みたいに無機質な瞳が上条の姿を捉えた。

少女は何かを叫んだ。

たったそれだけで、少年の体が薙ぎ払われた。

「ご、ぼ……っ！？」

爆撃に吹き飛ばされたような衝撃だった。

それを見てハッと正気に戻った美琴の前髪から紫電が散り、雷撃の槍が打ち出される。単発ではなく、連発で。その槍の連続技を受けても、鏡映しに何ら変化はなかった。すべての一撃が防がれ、相殺され、受け流される。

「何で当たらないのよ……ッー！」

さらに前髪から火花を散らす美琴。立て続けに一〇億ボルトの雷撃が発射された。

だが、超電磁砲が破られた時点で、美琴自身どこかで理解はしていたのかもしれない。

自分の電撃では、あの少女には届かない事を。

「――、――！」

少女が白い腕を突き出す。飛来する雷撃の槍のすべてが、避雷針のようにその腕に吸い込まれていく。

雷を飲み込んだ腕が、バチバチと帯電していた。

目の前を飛ぶ虫を払うような動作で、少女はその腕を横に薙ぐ。

その動作を追うように、青白い光が尾を引いた。その光の正体は電撃の帯だ。学園都市第三位のそれとは違い、扇状に変化した広範囲に及ぶ拡散攻撃が勢い良く射出される。

美琴が転がるように横へ飛び、上条が倒れるように地面へと伏せる。閃光を頭上にやり過ぎた上条が、ダメージの残る体を引きずるようにして立ち上がった。

（くそつ、いきなり何なんだ！？ 俺達についていうより、自分の周囲全体を攻撃対象にしているみたいだ。あれじゃまるで――）

そこまで考えて、上条はハッとなった。

鏡映しについて、土御門が言っていた言葉。目の前の存在を起点とした一連の事件の原因。彼は上条に何と説明していたか。

すなわち、

（能力の暴走……！ 具体的なイメージが今まで掴み切れてなかったが、こういう事かよ！！）

ギリッ、と奥歯を噛み締める。

土御門が説明していた鏡映しという能力。自らとある程度感覚を共有した分身を作り出す力。そして、相手の姿や思考力や技術までそっくりそのまま写し取る、規格外が存在。

その存在の、暴走。

今まで、上条は鏡映しの暴走とは、能力が使い手の手を離れてしまう事そのものだと思っていた。

だが、違ったのだ。

真の暴走とは、一番の懸念とは、まさに『これ』の事だったのだ。数多の能力を取り込む鏡映し。その秘めたる力は、恐らく上条には想像もできないような絶大なものだろう。具体的な『成果』を出すためには決して少なくない犠牲者が出るだろうという点に目をつぶれば、いずれは学園都市中の能力者が束になっても敵わなくなるほどの、それこそ七人しかいないと言われる超能力者（レベル5）の八人目に食い込めるかもしれないほどの圧倒的なものだろう。

だが、仮に。

それだけの力を持ったものが、それだけ絶対的な能力を持つ者が、何の秩序も信念もなく暴れ回ってしまったら？

人の意志をまるで介さない自然災害のような、破壊を撒き散らすだけの存在へと変貌してしまったら？

その結果は、今上条の目の前にある。

だが、あまりにも唐突すぎはしないか。

今までは、少なくとも会話はできた。ちゃんと美琴や上条の事も認識できていた。だが、今の少女の姿はまるですべてを拒絶して泣き叫ぶ子供のようだ。

こうなってしまった原因、引き金があったのだとすれば、それは、（幻想殺し（おれのみぎて）……って事かよ。ふざけやがって！！）「御坂！！」

上条は叫び、彼女の返事を待たずに鏡映しの元へと走り出した。

上条を迎え撃つように、氷や炎の塊が飛んでくる。避けられないものは右手で迎撃し、そうでないものはできる限り避けるよう努める。しかしやはりどうしても意識は防御など受け身の姿勢に傾き、進む速度が若干鈍る。

そうしている間に、相手は次のアクションへと移る。

何もない空間に、突然バスケットボールくらいの大きさの黒い塊がいくつも出現した。それらは膨張し、飴細工のようにグニャグニャとその形を変容させていく。

変化が収まるまで、一秒とかからなかった。

現れたのは、巨大な人影。全長二メートルほどはあるだろうか。細長い腕と脚がそれぞれ二本ずつ、人間で言えば頭部に当たる部分には、上に二つ穴があり、その下には三日月のような形の裂け目が見える。そして、そのどちらもが不気味な光を放っていた。

「な……っ!？」

突然現れた巨大な兵に、思わず上条の足が止まる。

そこを狙い撃つように、巨人が鞭のような腕を振るった。後ろから前へと。

まともに当たれば、首の骨くらいは容易くへし折れそうな一撃が襲い掛かる。

上条の反応は僅かに遅れた。避ける暇も防ぐ時間も彼には残っていなかった。

だが、直後にドバン!! と轟音が炸裂した。

巨人の大きな体が、一瞬だけ怯むようにグラついた。すぐさま体勢を整えた巨人は改めて上条へと狙いを定めるが、その一瞬の間に彼は既に巨人の懐深くへと踏み込んでいる。

右の拳を思いつ切り突き出す。

巨体な分、こちらの攻撃は命中しやすい。上条に殴られた巨人は、内側から爆発するように粉々に砕け散る。

「悪い御坂、助かった!!」

「まったく、手間かけさせるんじゃないわよ!」

叫び返す美琴の方にも、巨人は何体か群がっていた。

美琴は迫る巨人に雷撃の槍を放ち迎撃しているようだ。しかし、一。億ボルトの一撃を受ける巨人達は先程のように一瞬怯むだけで明確なダメージまでは結び付かない。

「こいつら、私の電撃が効いてない……ッ!？」

距離を取ろうと後退しようとする美琴に追い縋るような形で、巨人がさらに前へと足を踏み出す。

そこはもう、巨人の腕の射程圏内だ。

「しまっ……!!」

彼女が完全に言葉を紡ぐ前に、巨人の腕が伸びた。

まるで太縄のように腕を美琴の体を戒めると、そのまま巨体の形状を崩して縄と一体化する。ひらべったく伸びた厚さ三センチほどの黒い塊は、結果として美琴の首から下をすべて包み込むような形で彼女の体に巻き付いた。

「ちよつ、何よこれ!？」

巻き付いた黒縄から脱しようとする美琴がもがくが効果はない。そうしている内に二体三体と巨人が集まってくる。しかし彼らの役割は攻撃ではなかった。先程と同じく鉛細工のようにグニャグニャと蠢き、形状を変化させる。今度はまるで光沢のある鉄板のような姿を取った。そしてろくに身動きが取れない美琴の正面、背面、側面と壁のように立ち並び、仕上げとばかりに唯一の出口である頭上の四角い穴を塞ぐ形で最後の板が覆い被さる。

あつという間に、超電磁砲を封じ込める真四角の箱の完成だ。

「御坂ツ!？」

上条は思わず叫んだが、きちんとした応答はなかった。微かにその箱の中から怒鳴り声のようなものが聞こえてくる。こちらの声が届いているのかそうでないのかは分からないが、少なくとも箱の中にいる美琴はまだ無事のようにだ。

とはいえ、それだけでは微塵も安心できない。今にもあの箱が爆発しないとも限らないのだ。

上条はあの黒い箱を破壊するべく駆け出したが、妨害するように何体もの巨人が立ち塞がる。

「邪魔すんな!!」

右の拳を振るい、ドバン!! と一撃で巨人を粉碎する。しかし、一体二体破壊したところで巨人の数は一向に減らず、むしろ一体消えれば二体出現するようにどんどん増えてきている印象すら受ける。ゾンビみたいに群がってくる巨人が、その鞭のような腕を使った攻撃が、次々と襲い掛かってくる。さらにそうした単調なものだけでなく、時折足元の土や砂を投げつけて上条を牽制、視界を封じよ

うとしてくる。あんな外見ではあるものの、動物並の知能はあるのかもしれない。

（駄目だ、いくら打ち消してもきりがない！ このままじゃほとんど近づけねえ！）

上条の幻想殺しは、確かに異能の力に対しては絶大な効果を発揮するが、それにだつて限界がある。打ち消せる効果範囲が右手のみと限定されている以上、多方面からの攻撃、数で押されればどうにもならなくなる事もある。

（……いや、確かに”普通の人間”が相手ならそうだろうな。けど、右手に触れるだけで良いつてんならまだやりようはある。とにかく道を切り開いて、御坂のところまでたどり着ければ！）

拳を握って美琴に向けて駆け出そうとする上条。だが、直後に異変が起こった。

ボン！！ と、盛大な破裂音を立てて巨人が次々とその形を崩した。残滓が溶けるように消えていく。

「な……？」

さらにはその巨人から生まれた箱檻にも同様の変化が起こり、閉じ込められていた御坂美琴が解放される。

「え……？」

上条も美琴も、唐突な状況の変化に放心したように立ち尽くす。

幻想殺しは直接触れなければ意味がない。学園都市第三位の電撃が通用しないことは既に証明されてしまっている。

では、一体何が起こったのか。

その答えはすぐに返ってきた。

「……………あ、う」

鏡映し。

雪のように真っ白な少女の姿をしたその存在が、頭を抱えてうずくまっていた。その様子はまるで迷子の子供のように弱々しく、突けばそのままバラバラに砕けてしまいそうな脆さを感じさせる。先程の荒々しい光景が嘘のように、あまりにも場違いな静寂が周囲一

帯を包んでいる。

事実として、この少女はもう限界だ。

自分で発動した能力を自分で解いてしまった時点でそれは明らかだろう。しかもそのどちらも本当に彼女の意思が介在していたかどうかとも怪しい。歪んではいたものの、辛うじて保たれていた精神の均衡が、幻想殺しによつて崩れてしまった。ギリギリで踏み止まっていた最後の一線を超えてしまった。

くひつ

奇妙な音が聞こえた。

[illegible]

「ッ！！！！」

音はやがて爆笑に変わった。しかしその笑い声も、愉悦などの正常な感情からくるものではない。大きさも高さも安定しない、錆び付いた笑いだった。

「何なのよ、こいつ……」

美琴が怯えるように半歩後退る。事情を知る上条から見ても目の前の少女は異質なのだ。現状をほとんど理解していない彼女からすれば、コロコロと突発的に態度が豹変する鏡映しの様子はより一層の恐怖心を刺激するものだろう。

٧٠

「——ねえ、知ってる？」

笑い声が止み、代わりにそんな言葉が聞こえてきた。

最初、その言葉を発したのが誰なのか、上条には分からなかった
いや、正確には、その声の主がまだそんな”普通の言葉”を話せる
事が信じられなかったのだ。これまで異常性を見せつけられてきた
分、なおさら。

「自分の気持ちも、そのための行為も、全部が全部無意味だったと知った時の絶望を、あなたは知ってる？」

細い両腕で頭を抱え、独り言のように鏡映しは語る。

「『私』にはね、一人のお友達がいたの。明るくて優しい、大切な友達。でもね、その友達は陰で学校の先輩にイジメにあっていた。『私』は友達を助けようとした。でも、その友達を庇った事で、『私』もイジメの対象になった。……それからの日々は地獄みただったわ。飽きもせず毎日毎日、陰湿なことばかり」
だからね、とそこで一度言葉を区切り、

「そんなつまらないことばかり考えるような頭は、『私』がこの手で潰してやった」

「——ッ!!」

上条と美琴は、微かに息を呑んだ。

その告白が衝撃的だったから、ではない。

鏡映しの少女の、その顔。

口調こそまるで子供に昔話でも聞かせるような落ち着いたものでも、表情には深い悲しみの色が刻まれていたからだ。

「『私』はこの手で悪夢を終わらせた。でも、その結果を『私』の友達は喜んでくれなかった。それどころか、どうしてそんな事をしたのかって『私』を責めた！ 助けたいって思った『私』の気持ちは、他ならないその友達に全部否定されたのよ!!」

瞳を涙で濡らしながら、鏡映しは吼えるように叫ぶ。

「結局、『私』の気持ちも、そのための行動も、何の意味も価値もないくだらないものだったのよ!」

紡がれる言葉は拙い。それだけ、この少女は追い詰められていたという事だろう。

他人の姿だけでなく、記憶すらも完全に自分のものとして取り込んでしまう鏡映し。しかし、この悲痛な叫びは紛れもない『彼女』本人のものだろう。様々な人間の様々な思考に触発されて、その中

心にいる『彼女』自身の感情がそのままの形で溢れ出ているのだ。

上条は黙って少女の話に耳を傾けていた。

得られる情報なんて、ほとんど要領を得ない断片的なものでしかない。仮に詳しい事情を知っていたとしても、他人であり自分とやかく言える立場でないことも分かっている。

分かっている上で、彼はこう言った。

「馬鹿言ってるじゃねえよ」

ピクリ、と上条の言葉に反応するように少女の肩が小さく震えた。彼は構わず続ける。

「何の意味も価値もなかっただって？ ふざけやがって、”そんな訳がねえだろうが”！！」

本当に、全くもって見当違いな少女の意見があまりにも馬鹿馬鹿しくて、上条は叫ぶ。

「確かにお前は間違えたのかもしれない。暴力に訴える前に、もつと他の解決策を模索すべきだったのかもしれない。でも、お前はその友達を助きたい一心だったんだろ！？ 知らない振りを通して選択肢もあったのに、それでも見過ごす事ができなくて、だからお前はお前の友達を庇ったんだろ！？ だったらそれは無意味なんかじゃねえ。無価値なんかであるはずがねえ！ 誰かを救いたいて気持ちだが、何の意味もない、間違ったものであるはずがねえだろうがよ！！」

手段こそ間違えたのかもしれない。だが、だからといって少女の『友達を救いたい』という気持ちを取るに足らない無駄なものであったなんて、上条は絶対に認めない。

人が人を想う気持ちが、そんなぞんざいに扱われて良いはずがない。

「……ま、確かにこの馬鹿の言う通りかもね」同意の意志を示すように美琴が前へ出る。「他人の私かとやかく言える筋合いなんて本当はないんだろうけど、これだけは言っておくわ。アンタは逃げてんのよ。自分が良かれと思ってやった行為を否定されて、傷ついて、その現実から逃れるために飛躍した論理で自分の気持ちを含めた全部を否定してる。でもそんなの、駄々をこねてる子供と変わらないわ」

上条も頷き、鏡映しを真つ直ぐに見据える。

「大切な誰かに拒絶されて、悲しいって思うのは当たり前だ。けどお前が本当にそいつを友達だと思つてんなら、何もかも諦めちゃう前に、もう一度きちんとそいつの話に耳を傾けてみるよ！　目を背けずに、自分の目に広がる現実と向き合つてみるよ！！　でなきゃお前は一生後悔することになる。あの時ちゃんと話しておけば良かったって、そんな気持ちを抱えたまま生きていくことになる！　それでもいいのかよ！？」

「う、
声
が
漏
れ
た。」

「うとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとうとう！」「
一見意味のない言葉の羅列。しかしそれは、少女の胸の内に燦る
葛藤を吐き出しているようでもあった。

鏡映しが両手を前に突き出す。そこに光が集まる。赤や青、緑に黄に白、様々な色を帯びた眩い光の収束が七色に輝く球体を生み出す。内に記憶された数々の能力を一点に集めることで絶大な破壊力を生み出す必殺の一撃。しかし、

「なっ、何よあれ!？」

思わずという風に叫んだのは美琴だ。

最初に見た光の球がテニスボール程度の大きさだったのに対し、今度のそれはまるで大玉送りの玉のように巨大だ。空気が振動し、球体が放つ輝きが、ただそこにあるだけで夜の闇を吹き散らす。

「冗談じゃないわ……！ あんなの撃たれたら、もう手の打ちよう

なんてないじゃない!!」

確かに、最初の一撃が御坂美琴の超電磁砲を打ち破るほどの威力なのだ。単純に大きさが破壊力に直結するのだとしたら、あの光球にどれだけの力が込められているかなんて想像もできない。

だが、

「いや、待て。よく見ろ！」

上条の言葉に美琴は改めて光を見つめ、そして気づく。

綺麗な真円を描いていた球体の形が、わずかに歪み始めている。揺らいでいるのだ。

もともと精密な演算の上に成り立っている能力を複数掛け合わせるという反則に近いデタラメな技なのだ。今の心が乱れた鏡映しに、あれだけの巨大な力を制御し切る余力など残っていない。

このままでは、暴発した力がより甚大な被害を及ぼす事になる。

二人の判断は一瞬だった。

「御坂、頼むッ!!」

「言われなくても——」

御坂美琴がポケットからゲームセンターのコインを取り出し、右の拳を固く握り締めた上条当麻が前へと駆け出す。

「喰らっつけ!!」

放つ。

音速の三倍もの速さで撃ち出された超電磁砲は、轟音と閃光を撒き散らしながら上条の顔のすぐ横を突き抜けていく。上条はそちらには見向きもしない。己のすべき事を自覚した上で、ただただ正面を見据える。

この戦いで必要なのは、確実に勝利するための小細工ではない。ただ自分のすべてを、正々堂々真正面からぶつけることだ。

そして、閃光と光球が再び激突した。

先程は完全に力負けしていた超電磁砲は、ここに来て拮抗を見せた。正面から突き刺すような一撃を見舞われた大玉が破裂寸前の風船のように膨張する。

直後。

ボンッ！！ という破裂音と共に少年の右手が真っ直ぐに光球を捉え、その一撃をまとめて粉碎する。

余波が発生した。

荒れ狂う力の波が、上条の体を吹き飛ばそうとする。上条はそれを全力で歯を食いしばって堪え、さらに大きく一步前へ踏み出す。

そこはすでに、右の拳の射程圏内だ。

「――、」

懐深くへと潜り込んできた少年の姿を捉えた鏡映しの瞳が大きく見開かれる。

「お前の抱えているものが、お前自身をも苦しめるようなくだらねえものだっていうのなら」

その拳を限界まで握り締め、

「そんな狂った幻想は、ここでまとめてぶち殺す！！」

轟音が炸裂した。

上条の拳が、鏡映しの顔面に正確に突き刺さった音だった。

わずかな間を置いて、ピシリ、と少女の顔に蜘蛛の巣にも似た亀裂が走る。

「――、」

その時。

徐々に体に走る亀裂を広げていく中で、少女は小さく笑ったように見えた。

そして、純白の少女はガラスのように砕け散った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4212j/>

とりあえず魔術の禁書目録

2011年10月9日20時51分発行